

これまでの芸術ワーキンググループにおける 主な意見

第1～8回芸術WGにおける主な意見①

【創造性】

- 芸術系教科の特徴として**創造性**がある。自分にとってどんな価値があるかを考えることにより、世の中の様々なことが自分にとって意味のあることになる。それが芸術系教科を学ぶ意義ではないか
- 美術教育における**創造性について、意味や価値をつくりだす**ことは、見方・考え方に位置付けられているが、現実に対する意味、そして、まだ見ぬ未来に向けた意味、つまり、子供による問題提起が重要
- **創造**することの喜びを味わい、自ら考え、自らものをつかっていくという創造する能力は変化の激しい社会において重要な資質・能力であり、芸術系教科の根本となる。
- 児童生徒が主体的に自分の感性で作品をつくる際の前提としてコンセプトワーク（企画・構成力）を大事にしたい。論理的思考、**創造的思考**、批評的思考などが複雑に入り込んでいる。イノベーションが求められる現代社会においてこれら三つの思考は重要。
- 芸術教育は鑑賞者だけではなく表現者を育てるということを考えたときに、**創造性**と結びつく。子供たちの**創造性**を育むために、教師がどのように**創造性**を意識した授業デザインができるかを考えることが重要。
- 芸術系教科において**創造性**を育むためには、知性と感性をどのように関連付けて新たな価値を生み出すか、または自分で価値を見出すか、という学習が重要。
- 中核的概念等の示し方に関しては、現行の学習指導要領を発展し、**創造性や感性**といった要素でまとめるべき
- **創造性**は高次の資質・能力であり、**創造性**を支える基盤的能力を柱の中に位置付けることにより指導の具体性が実現される。
- 【音楽】音楽は再現芸術が中心であり、既存の曲から作曲者の意図を探りながら演奏していくという特徴がある。授業でみんなで演奏する活動で、作曲者の考えや音楽構造を読み込んでいく中で、いかに自分のオリジナリティのある表現を見いだしていくか、それをみんなで表現し創意工夫を位置付けていくのが大事。
- 【図画工作】図画工作・美術科の現行の見方・考え方の文末は「意味や価値をつくりだすこと」であり、**教科の本質的意義である創造の重要な部分**である。「つくる」ではなく「つくり、そしてだす」という中に、これまでになかった意味や価値を創出する意味がある。創造は現状の問題解決のために発揮されるだけでなく、未来に向けた問題提起としても発揮される。
- 感性や**創造性**が大切であり、感性はよさや美しさについて心が動く、この点を育てることが重要。**創造性**では、身体も使いながら自分自身にとっての意味や価値をつくりだすことが重要。それは、自分自身をもつくりだすことである。
- 【音楽】創造は大事なことだが、**言葉自体が様々な意味を持ち、文脈によって意味が変わるので慎重にならないといけない**。
- 【音楽】創造性は音楽の理解や技能、習得だけでなく、自らが音を生み出して新しい表現を構築する力。**創造性という資質・能力に主軸を置いて考えることも必要**であり、どのような資質・能力と関連するものであるかをぶれないように考えていく必要がある。

第1～8回芸術WGにおける主な意見②

【創造性】（つづき）

- 【音楽】「創造的」が入ることで**芸術系教科の意味や意義が明確になった**。ただし、小学校では少し難しい可能性がある。
- 【美術】目標のレベルが造形的な使われ方に限定されている印象。**造形的な観点にとらわれすぎると、創造の土壌を耕す教育に繋がるかどうか疑問**。
- 【美術】「感性や想像力を働かせ」の「想像力」を「創造力」にしてはどうか。考え方が限定的なものから、のびのびとイメージを広げるというものにするという考え方で、クリエイティビティの創造が適しているのではないか。
- 【美術】学びに向かう力、人間性等については概ね同意だが、「美術の創造活動に取り組み」については**柱書に持って行く形に戻してもよいのではないか**。
- 【美術】美術教育の目標は、創造的な取組を通じて、主体的に世界を経験し探究することがベース。美術そのものが目標ではなく、**創造的な取組が世界を経験するための手段**。
- 見方・考え方の文末が「意味や価値をつくりだす」となっており、前段は様々だが、意味や価値を見いだす・つくりだすという事が、芸術系科目を通底した部分になるのであれば、**創造性の意味や価値を教育の中の重要な思考の一つとして位置づけるべき**。
- 各学校段階の目標について、小学校では「創造的につくったり見たりする技能」が新たに入っているが、創造の過程を考慮すると「創造的につくったり創造的な視点をもって見る」などしたほうが、教員が評価しやすいのではないか。
- 【音楽】小学校の目標について、知識及び技能の「曲や音楽を創造的に表現する」や学びに向かう力、人間力等の「創造的に音楽に関わり親しむ」の部分、「創造的」という文言が入るのはよいが、**文言の整理が必要**になってくる。知識及び技能の後半の技能に関する部分は、思考力、判断力、表現力等の「思いや意図をもったり～」との関連も出てくると思うので**3つあわせて整理の必要**がある。
- 音楽科の学習過程が、様々な活動をしながら諸感覚を働かせ、資質・能力を生かしながら資質・能力を高めていくこと踏まえると、私がイメージする高次の資質・能力を身につけた児童、生徒の姿は、「何かができるようになったら終わり」ではなく、**既習事項を想起して新たな価値を生み出す姿**だと考える。
- 【音楽】中学校音楽の目標見直しについて、「創造的」が知識及び技能、思考力、判断力、表現力等、学びに向かう力、人間性等の3つすべてに入ること、**逆にぼやけてしまうのではないか**。今後改めて整理していくべき。

第1～8回芸術WGにおける主な意見③

【感性】

- 子供にとっての芸術系教科を学ぶ意義に関し、**子供の中心には感動（心が動かされる経験）がある**。調査結果からもその必要性は感じているが、音楽の学習が役に立つということを感じていない子供が多いことから、音楽を学ぶ意義を子供たちが捉えられるようにしていくことが大事
- 芸術系教科は**人間の感情に直接的に影響を与える**ことができる。**感性と知性の両輪を働かせることが重要**。特に感性に重きを置くモデルや知性に重きを置くモデルがあってもよい
- スマホなどで考える間もなく情報が入ってくる中において、芸術系教科を通して自分とは何か、美しいと感じた理由は何かを思考することで、新たな価値をつくりだすということが重要。正解を求めるのではなく、身体と心を使い、感覚的に捉えることと論理的に思考することを繰り返すことによって、実感的な理解をすることに意味がある。
- 芸術系教科を学ぶこと自体が**感性**を育む上で重要であり、**つくりだす喜びそれ自体の大切さ**も忘れてはならない
- 芸術系教科を学ぶ意義を明確化することは教師にとっても子供にとっても重要で、**「感性」は一つのキーワード**になる
- 芸術系教科は**感覚的に捉えることが感性の育成にも繋がる**という特性がある。また人間の感情の変化に影響を与えたり、人間として芸術活動をする上での喜びを体験することが精神浄化につながっていく。
- 【書道】書道の制作過程は一回性であり、筆記具とその対象となる紙が触れ合う**触覚、研ぎ澄ます視点**が重要となる。
- 【音楽】見方・考え方について、もう少しすっきりさせるために、「音や音楽を芸術的な感性及び知性を働かせて捉え」、としてはどうか。これからのA Iの時代や、将来の仕事の展開を考える時に、**芸術的な感性及び知性は大事な視点**。
- 【音楽】「豊かな情操を培う」ことが科目目標に明記されるのは重要。
- 【音楽】自己のイメージや感情のように**直感的に想起されるものについて、自分にとっての意味や価値を見いだすために必要**。楽しさや美しさを意識するためには**感情面との結びつきが大事**。内容を含めどこかに記載が必要なのは。
- 「感性を働かせ」を文頭（見方・考え方）に置くのなら、冒頭の言葉が後段にもかかってくるので**「感性や想像力」の方が適切**。
- **「感性を働かせ」が文頭（見方・考え方）にきているのは重要**。感性や想像力が、造形的な視点でとらえる際や、意味や価値をつくりだす際のいずれにも働かせていることがこれまでの学習指導要領にも位置付けられている。
- 【書道】「書の美を感じ取り」となっているが、**高等学校では、美ということについて考えることが重要**。今後の検討の中で、**芸術教科全体の目標や見方・考え方、共通の学びとして美を位置づけられないか**。
- 「豊かな情操を培う」をすべての教科・科目の目標に入れたのは良いこと。情操とは、**心が動いても元に戻る、復元して安定して、その人自身の機能をフルで活用させられる能力**だと考えている。説明においても、そうした気持ちを安定させることも含むよう整理できるとよい。
- 「感性を働かせ」（見方・考え方）に関して、芸術教科の領域を代表する文言の一つであり、可能な限り共通した書きぶり・表現・言葉遣いがふさわしい。**すべてに関わる土台という意味で、文頭に感性がくるのはありうるのではないか**。
- 目標からみたとときの高次の資質・能力を考える必要もある。初めて教員が「高次の資質・能力」を見たときに、「高次の」が論理的なイメージになってしまうのではないか。**芸術の基本である「直感」「感性」「創造」などのキーワードを入れるのがふさわしいのではないか**。

第1～8回芸術WGにおける主な意見④

【身体性】

- 身体性を音楽学習のみならず、教科横断等の枠組みに位置付けることで、我が事としての学習が実現し、ひいては全ての教科等にかかれた感性や知性、創造性の土壌となり得ると考えている
- 芸術系教科では、実際に本物に触れる教科特性があるので、身体性が重要。思考・判断・表現の技能に偏った授業も見られる中で、聴いたり、目で見たり、感じたりしたことを学びとして表現したり、言葉で表していくことも大事
- デジタル機器の活用も大切であるが、実際の対象物を諸感覚で感じるフィジカル要素も重要
- 体験活動や諸感覚を働かせて学ぶフィジカルに関するものが教科理解の上で重要。幸福な人生の実現のためには、トップダウン型の学習だけではなく、美術教育に多く含まれ、学習者本人のありようを尊重した学びであるとともに、幼児期から繋がる諸感覚を駆使した身体性の学びであるボトムアップ型の学習が必要である。
- 芸術系教科の意義、強みは、個人の身体的体験により感情や感覚を巻き込んだ学びができること。個人の感覚・感情と結びついた学びにより身に付いた知識は、他の学習でも生き、ちょっとした違和感に気付く能力のように社会の様々な職業でも生きる。
- 体験が大事であることは言葉で伝えるのではなく、実際の音楽体験や造形体験に基づいて子供たちが実感するものでなければならない。美しいものをつくらなければならないという結果を重視する価値観が子供たちの中にあり、それを払拭していくことが重要。
- 【美術】身体の諸感覚を働かせることは重要であり、芸術系教科の役割。検索すればすぐに答えにたどり着ける環境も大事かもしれないが、逆に想像すること、新しいものをつくりだすこと、問いを立てることの妨げになり得る。タブレット端末は答えを見つけるのではなく、問いを生み出すことに用いられることが重要

【想像力】

- 想像力は図画工作・美術の現行の見方・考え方に含まれるキーワードであるが、芸術系教科・科目全体で育成すべき資質・能力としていくことが重要。想像力を生かし、授業で学んだことと社会や生活の中での芸術に共通項を見いだすことが芸術を学ぶ意義の認識に繋がる。
- 【図画工作】図画工作では児童が自分のイメージをもちながら主体的に発想や構想をすることが重要であり、発想や構想をする時間を確保することやICT端末を活用することも考えられる。
- 【音楽】現行学習指導要領では「自己のイメージや感情」が入っているが、たたき台では削除されている。現場の子供たちの様子を踏まえると、削除してもよいかどうかは検討が必要ではないか。
- 思考力、判断力、表現力等について、言葉で考えず、頭の中で想像することが点と思うので、イメージ力は強調してもよいのではないか。

第1～8回芸術WGにおける主な意見⑤

【多様性理解】

- 「**多様性の包摂**」はこれからの時代において重要。特に芸術系教科ならではの様々な学びにつながる
- **多様性を個人や社会の力に変えていく**という点が芸術系教科の強みであり、これを基本的な考え方として、芸術系教科を学ぶ意義を考えていきたい
- 芸術系教科は絶対的な正解がない学びであるので、**多様性（寛容性）の概念**も入り得るのではないか
- 芸術系教科では、一人一人の特性を生かした学びが可能となる。特別支援教育の学びは芸術系教科との親和性が高く、例えば合唱では声が高い人、低い人で別れて歌うが、これはインクルーシブな場であり、**多様性の包摂にもつながっていく**
- コマ撮りアニメやプロジェクションマッピングといった様々なデジタルを活用した題材が行われているが、小学校のクラスに学習面や行動面で著しい困難を示す児童がいる現状で、デジタル学習基盤は**多様性を包摂**するために使うことも考えられる
- 芸術系教科は分からないことや理解できないことに面白さを感じる事がスタートであり、理解することがゴールではないところに特色がある。探究を通して、自分や他者、世界や社会におけるウェルビーイングを理解していく楽しさが、**多様性につながる**と考えている。
- 表現や鑑賞における対話において、自分の考えや意見をもつことに加えて、他者を受け入れる学習が学校教育の学びとして重要。将来社会で他者と協働しながら生きていくことに有効であるとともに、互いに尊重する態度を育することにより**多様性の包摂**の視点からも重要となる。
- 【書道】教師の提示する文字や作品にいかに近付けるかといった再現性を求めるだけの授業からいかに脱却できるか。ICTを活用して生徒の学習履歴を保存することで、生徒一人一人が感じたり考えたりしていることが異なったり、単元が進む中で、自己や他者の考え方や感じ方が変容していくことを自分として確認することもできる。そうした活動の中で、自己の考えをどのように形成していくか、という視点が、**多様性の包摂**につながり、芸術科の強みである。
- **学びに困難を抱える子供たちにとって芸術系教科の学びは重要**。論点整理に示されている「「好き」を育み、「得意」を伸ばす」が、各教科の特性を考えた時に学びに向かう力・人間性等に限られず深い学びの実装にも関わるという視点からの検討が必要。

第1～8回芸術WGにおける主な意見⑥

【主体性】

- **子供自身が考えることができる指導が重要。**指導過多でも放任でもなく、教師が指導することと子供が考えることとのバランスを考慮ことや、**学習の過程を重視した指導が求められる**
- 表現と鑑賞の関連について、例えば、国際バカロレアの中等課程では、調査研究を行い、深く文脈に沿って美術を捉え、アイデアを探究し、創作し、振り返りをする。**作品だけで評価するのではなく、過程を大切にすることにつながる**
- **子供自らが問いを立てて課題を解決できる**ような授業を考えることが大切。また、教師自身が授業を通して、どんな子供を育てるのかを考え、子供の姿からその資質・能力を発揮できているか捉えて、価値付けていくべき
- 子供の表現に関わる大人や周囲の環境について、教師や子供と関わる大人等の学習観や子供観もアップデートさせることが重要。**子供が自律的に学習することがどういうことなのかについて共通理解を得るべき**
- 【音楽】思考・判断・表現と表現の技能をつなぐ資質・能力として、**試行錯誤する力が重要**。試行錯誤して答えを見つけ出すことは問題解決の能力として重要である一方で、試行錯誤する場面が少なくなっている。量的な時間としてではなく身体により体験される質的な時間として試行錯誤の重要性を考えていく必要がある。
- 【美術】美しいと感じると同時に、なぜ美しいと感じたかを考えたり話し合ったり説明したりする力がますます重要。教師が視点を示すことは、発達段階に応じて必要だが、**知識を一方向的に教えるのではなく比較したり語り合ったりして自ら獲得していくことが重要**。また、教師が子供の多様な視点や考え方を見付けたり価値付けたりして、子供が気付いていないところも教師が拾い出して整理する力が求められる。
- 【図画工作】学びに向かう力・人間性等の「主体的、協働的に、楽しく創造活動に取り組み」の部分は、現行学習指導要領の学年目標にも記載があり、**楽しさを感じながら創造活動に取り組むことの大切さを改めて打ち出しており重要な視点**。
- 【図画工作】「主体的・協働的」は、**教師が指導することと子供が考えることとのバランス**を考え、子供たち自身が考えることができるようにするというところに繋がるものであり重要。

第1～8回芸術WGにおける主な意見⑦

【文化の理解】

- 文化への理解は重要であり、**我が国の文化**とはどういうものなのか、どういう文脈でその文化があるのかといった、**広い視野でとらえることが大切**
- **芸術が生まれてくる背景や歴史の基となる文化や社会があることを理解**することが重要。グローバルな視野の下に自己を見つめ、多様な文化理解に伴って再度自己理解へつなげていくことも必要。
- 芸術系教科の特質は、**文化芸術の継承と発展**を担うもの。
- **伝統文化の学習は重要**。日本人としての見方あるいは考え方、ひいては日本人とは何かを考えることが重要
- 伝統文化の学びについて、外国の文化を知ると自国の文化のよさも学べる。**地域素材や我が国の伝統音楽に関する教材を用いるなど、学校で伝統的な音楽や文化をしっかりと学べるようにしていくことは重要**
- 発達の段階を踏まえつつ、鑑賞だけでなく、表現においても**文化の理解**について学び、芸術系教科全体を通して学習することが大事。
- 【音楽】グローバル化する社会で生きていくために異文化理解が重要であり、我が国の郷土や伝統音楽に対する理解はもちろんのこと、**世界の諸民族の音楽に対する理解**について学ぶ意義を示すことは大切。
- 【美術】子供たちが身近な生活の中に根付いている美しい文化を見付けだすという活動を通して、自国だけでなく他国も含めた**文化の理解**に繋げていくことが重要。
- 【書道】伝統文化の視点として、自国の**文化の理解**は他国の**文化の理解**につながりその逆もしかり。グローバルな視点、多様性の包摂に繋がっていく。日本特有の視点がこれからの社会で日本独自の新たな価値を生み出す根底になる。
- 【音楽】見方・考え方の教科固有の考え方や判断の仕方に、**小学校にも「伝統に関わらせる」ことを含めていることは重要。**
- 【図画工作、美術】「文化」が各学校段階に位置付けられている（見方・考え方）が、子供たちには継承と創造の二つの意味をもつ。**文化がもつ意味をふまえ、発達の段階に応じた文化の位置付けを整理していくことが重要。**
- 【美術】美術文化と豊かにかかわる資質・能力の育成について、教師がその価値を一方向的に教えるのではなく、**子供たちが作品と出会い、自分自身の目でよく見ることを出発点にして、美術の働きや美術文化のよさを楽しみ、味わうことが重要。**
- 【美術】美術文化の理解というと、鑑賞をイメージする教員が多いかもしれないが、全国における実践には表現の授業も数多くみられる。**見ることとつくることの両方を通して、文化が身近な生活にあり、歴史の中で受け継がれてきたという実感的な理解に繋がっていくことが大事。**
- 【書道】伝統や文化について、伝統文化の目標に係る文言には賛同するが、**見方・考え方に含めなくてよいのかどうか検討が必要。**
- 【美術】「美術や美術文化と豊かに関わる」（目標の柱書）について、「美術や文化と豊かにかかわる」としてもよいのではないか。芸術系教科は文化を根底から広く捉えられる教科であり、芸術が相互に関連していると考える。

第1～8回芸術WGにおける主な意見⑧

【文化の理解】（つづき）

- 子供たちが向かうべきは**文化を継承し発展することであり、発展させるという思考を育むために、創造力、意味や価値を見いだす**という風に働かせるべき。
- **【図画工作・美術】見方・考え方については、各学校段階を通して共通に示すと記載があり、全体が端的に示され、かつ文化を重視することを踏まえた修正がなされている**のはよいと思う。伝統という視点いれる考え方もあるのでは。未来の社会の在り方を創造することや、学びを生きた知識や技能に学びを繋げていくためにも、**伝統と文化は切り離せない存在である**。
- 各科目の見方・考え方に「伝統や文化などの視点」などの文言が共通して入ったのは、**文化に対して責任持つ教科というのが明確にできて良かった**。文化と我々が取り上げたときにはそこに継承と発展がある。**子供の学びに文化としての発展を踏まえている**ということおさえておきたい。

【協働性】

- 子供たちが芸術系教科の意義を感じながら学ぶことが重要。学校という集団の中で芸術を学ぶ意義とは、**他者と自分との関係性の中で学校が相互承認の場であり、自己肯定感や自己有用感が育まれていく**
- 端末を活用しながらも、個人的な作業ではなく、ともに学び**他者と一緒につくりだす喜びや自分が刺激を受ける喜びが必要**であり、学校で芸術を学ぶ意義はここにある。
- **【音楽】聴覚だけではなく、視覚や雰囲気など諸感覚を働かせた学びが重要**。音楽は時間の流れとともに消えゆく芸術であり、一回のみの時間を楽しむことに音楽のすばらしさを感じられる体験が大切。**仲間と一緒につくり上げる**ことの喜びが特徴であり、少人数での可能性や自分で選んだ仲間とともにつくりあげる、多様性を意識することも重要。
- **【音楽】音楽は諸感覚を使う科目であり、仲間とつくり上げながらも自分がどう生かされているか、どんな役割を果たしているかを捉えることが必要**。伝統文化を題材にするときには自分自身が文化の継承者であることなどを自覚できるようにすることが必要。
- **【メディア】創造的なプロジェクトを協働して実行する力**を育むことが重要。作品を構想して発表するまでの間に多くの対話があり、自身の考えを表明するとともに他者の多様な考え方を受け入れ問題解決の糸口を探る。よりよい社会の形成や民主主義社会の基盤を支えることにもつながっていく。

第1～8回芸術WGにおける主な意見⑨

【知識・技能】

- 芸術教育そのものである**知識・技能の学びを大切にすることが芸術教育の本質**である。
- 【音楽】音楽をイメージや感覚で捉えるだけでなく、**用語や記号を正しく理解することで他者との共有や共感が可能となる**。知識を積み上げていくことで、生活体験と関わらせながら音楽の**理解がより深まる**ことに繋がる。
- 【図画工作】児童が自分の表したいことに合わせて表現方法を選んだり組み合わせたり新しい表現方法をつくりだしたりする、**自分なりの表し方を工夫することが技能として重要**であり、深い学びや**創造性**につながる。
- 【美術】形や色彩、材料、光などの造形的な特徴などを基に全体のイメージや作風で捉えるといった**知識を今後も明確に示していく必要**があり、言葉を使って考えたり、話し合ったりする学習の充実に繋げていく必要がある。このような知識を得ることがものの考え方や捉え方の豊かさになり、**学びの深まりが生まれる**。
- 【音楽】音楽の**技能**は学校を離れたときに、自分一人では身に付けることが難しい性質があるからこそ学校でどのような資質・能力を身に付けていくのかを考えていく必要がある。**音楽に出会ったときに理解できないことが拒否につながるのではなく、学びや豊かな人生のスタートになるためにどう考えるか、どのような知識が必要なのか、自分たちで探究していく力が大事**。
- 【音楽】「②表現したいことをどのように形にできるか」について、技能は含まれるのかどうか。表現したいことをどのように形にできるかに関して技能は関わってくるものであり、**思いや意図をもつことは当然だが、それをどのように形にできるかは技能が必要**となる。
- 【図画工作】**知識と技能の両面に関連させた議論が重要**になってくるのではないか。
- 【図画工作】知識及び技能の「造形の働き」の部分について、**自分や友達の作品、生活の中の造形的作用や役割を理解することは図画工作科を学ぶ意義に繋がる**。
- 【美術】知識及び技能の「みることができる」が「創造的」にかかっているのは疑問。鑑賞は創造的に観ることより根拠をもって類推していくことが主である。**知識及び技能の対象を表現・鑑賞に留め、取り組み方、目標達成のレベルのように段階的に記載するのがよいのではないか**。
- 【美術】**美術の働きや美術文化**を知識として記すことは概ね賛成。鑑賞のみならず、表現活動でも行う事で、美術文化を実感としてとらえることができる。注意すべきは、実感を伴いながら理解を深められるため、**表面的な学習にならないように学校現場に説明していく必要がある**。
- 【映像】届けるもの（メディア）があつて初めて人々の目に触れる。**メディアの特性やどのようにそれが届けられているかという点に関する知識も必要**だが、あまり強調されていないのではないか。
- **芸術系教科・科目において知識及び技能が何であるかということは問い直す必要がある**。鑑賞における技能が成立するのかどうかを含めて改めて考えていくべき。
- 【図画工作】目標の後半に「創造的につくったり」とあるが、高次の資質・能力では「実感を伴って理解している」となっており、**目標と高次の資質・能力が演繹的に対応していると言えない**。

第1～8回芸術WGにおける主な意見⑩

【知識・技能】（つづき）

- 高次の資質・能力に「～実感を伴って理解している」とあるが、音楽の学習において「わかること」、「できること」といった基本的なことから考えていかなければならない。獲得すべき知識及び技能は、手続き的なものを含んでいる。今の書きぶりだと、実際に「できる」ことよりも、それを言語化できることに重きを置くように見える。学習評価を考えると、「理解している」という文末の表現は課題が残ると考える。
- 「～実感を伴って理解している」の表現では、これまでの知識及び技能の捉え方と変わってくるので現場で混乱する恐れ。「統合的な理解」については再考が必要と考える。解説などで十分な説明が必要になる。
- 高次の資質・能力の文末が「実感を伴って理解している」となっているのは、一見整理されたように見えるが、音楽科において「理解」という言葉は知識のみで使われており、技能では使われてこなかったので誤解が生じる可能性がある。身体で出来るようになることが軽んじられているように見える。技能習得の時間が削られることの無いように再度検討いただきたい。
- 「実感を伴って理解している」について。これまでと異なる解釈になるので現場で誤解されないかと危惧。中高の教師は専科なのでまだ理解できるかもしれないが、小学校では学級担任が受け持つので特に心配。教員以外も広く学習指導要領を読むことを踏まえると、文章表現をそろえることが本質的なのかは疑問。内容は問題ないが、表現ぶりは検討が必要。
- 「実感を伴って理解している」について、解説が欠かせない。「高次の資質・能力」と「個別の知識及び技能」・「個別の思考力、判断力、表現力等」に順序性があるように感じてしまう。
- 「実感を伴って理解」とあるが、技能を理解すればよい（実際にできなくてもよい）という誤解を招きかねない。知識及び技能は往還関係にあると思うが、順序があるように解釈されないか。
- 「高次の資質・能力」の「捉える」と、資質・能力（概略）の「理解する」の違いは何か。誤解を生むことがない文言にしていかなければいけない。
- 知識及び技能の「実感を伴って理解」は、美術科は他教科の技能とはとらえ方がずれる面もあると考えられるので慎重に考える必要がある。
- 【書道】知識及び技能の「実感を伴って理解」について。メタ認知するという意味で一定程度理解はできるが、技能は体で覚える側面もあることから「理解する」ということには慎重に検討してはどうか。
- 知識及び技能の高次の資質・能力の「理解する」は何を指すのか。言語化することよりも「創造的に表現できる」ことが一番重要であることが学校現場に伝わるようにすべき。高次の資質・能力は子供が最終的に到達できる姿をプレビューしたものと理解。
- 高次の資質・能力について。個々の知識や技能が並列な絵が示されているが、ある知識と知識が統合して新たな知識を獲得するなど、階層がある。「個別の知識」というひとまとめにするのは適当ではないのではないか。
- 【音楽】目標に「曲や音楽を創造的に表現する」とあるが、再表現だけでなく、思いや意図をもって表現することを考えると、「思いや意図にふさわしい表現をするために～」であったり、「曲や音楽にあった表現をするために必要な技能」といったようにしてはどうか。

第1～8回芸術WGにおける主な意見⑪

【知識・技能】（つづき）

- 【音楽】目標に用いられている「曲や音楽を創造的に表現する」の文言。歌唱や器楽の学習では、まず曲が存在するのに対して、音楽づくりや創作では、音を音楽へと構成するので、「曲と音楽」と併記しているのだと想像する。しかし、歌唱や器楽においても、曲という形や様式を踏まえつつ、自分の感性やイメージに基づいた質感の表現を目指すという意味では、**「音楽を創造的に表現する」という言い方でも十分に趣旨が伝わるのではないか。**
- 【音楽】技能の理解についていろいろ検討いただき感謝。「言語化できることと言語化できないが理解できていることということが～」と記載があり、これにより学習のあとに、身に付けたことを必ず説明しないといけない授業が増える**危惧がなくなる**のではないか。
- 知識及び技能に関する統合的な理解の文末記述について、**「言語化して理解できることと言語化はできないが身に付けることがある」ということは大事。**
- 知識及び技能に関する統合的な理解の文末表現について、**丁寧に説明していく必要**。どのように伝えていけるかがとても大事。
- 【音楽】「音楽表現を深めることができる」という点については技能的なイメージがあるので、**「音楽表現における技能的な部分」の技能をどう捉えて提案していくか、考え方の整理が必要。**
- 【美術】高次の資質・能力の最後を「理解している」でまとめることで混乱が生じつつも、**教育現場が受け止めやすい表現**というのもある。
- 図画工作や美術の知識を位置づけるにあたり、**「美術の働き、美術文化について理解を広げる」というのが実施状況調査の結果等を踏まえると重要**。今般教育に携わる関係者でも芸術文化の働きについて十分な理解されているとは言えない。将来、社会を支える子供たちに、芸術教科は芸術だけで完結するのではなく、**他の多くに相互に支える能力を育てているということへの理解を促すことはとても重要。**
- 【美術】知識及び技能に関する統合的な理解について、生徒がほかの学習や生活の場面でも活用できるようになった姿をイメージできる思いが込められ、丁寧でありがたい。「実感を伴って理解している」という文末表現が、今回中学校美術などで「美術の働きや美術文化について実感を伴って捉えながら」と**場所が移動しているのは意味があるのでは**と思った。鑑賞領域についても「実感が伴って」の文言が入っているのはありがたい。
- 【美術】中学校美術の**「自分との関わりの視点から」の文言は、「自分との関わりから」でもよいのでは。**
- 【図画工作】知識及び技能に関する統合的な理解について、文言整理された。ここをしっかりと**丁寧に説明していくことに加え、よりわかりやすくなるよう検討を続けていく必要がある。**
- 【図画工作】図画工作ではこれまで知識を共通事項として取り扱っており、知識を活用して思考力、判断力、表現力等を働かせていると解説されている。それをふまえると**高次の資質・能力の知識と思考力、判断力、表現力等の関係についてどう整理するのか、今後検討が必要。**
- 【工芸】目標の知識及び技能の鑑賞領域について、工芸Ⅲでは「工芸作品などの情報を精査しながら情報を読み取る」とある。これまでの学習指導要領になかった文言で現場には戸惑いがあるかもしれないが、**工芸の立場からすると情報を読み取る、精査するというのは工芸の学習にとっては重要な要素である。**

第1～8回芸術WGにおける主な意見⑫

【知識・技能】（つづき）

- 身体性を含む表現に「理解している」の文言について、各教科で技能をどのように捉えているか気になる。例えばダンスは芸術表現と捉えると、保健体育と芸術科の技能の位置づけは同じような部分がある。そうしたことを踏まえて知識及び技能の整理がされ議論されていくことが理想で、教科横断的な学びの実現を現場教員が考えた時のヒントになる。
- 各教科科目において「理解する」という言葉を使いながらその内容が違うというのは現場の混乱を招く危惧があり、各科目で「理解する」の意味内容や技能の捉え方が整理されていくと良いと思う。
- 高校では各科目を学ぶ前提として「芸術を学ぶ」という視点が重要であり、科目を超えて芸術を学ぶ意味や価値を考え、どんな見方・考え方ができるようになったか再認識していくことが大事だと考える。芸術の知識及び技能の目標に「各芸術分野の～」と示されたことで、教科目標にそれが反映されてとても良い。
- 知識及び技能に関する統合的な理解について、子供がそのように自覚している状況を指しているのか、または低学年の子供がそのように自覚しているかというところは発達段階から完全とはいえないので、子供がそのような状態になるように教師が自覚しているのか、あるいは両方指しているということも考えられる。丁寧に言語化する必要がある。

第1～8回芸術WGにおける主な意見⑬

【思考力、判断力、表現力等】

- 【音楽】「思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮」の「よりどころにして考え」はよいと思う。
- 【音楽】表現領域で、「表現」という単語が何度か出てくる。それぞれで文脈によって意味が若干変わっていることが伝わるか疑問。特に最後の「表現を深める」は技能面を含んだように解釈できるので、「できないといけないのか」と思われかねない。
- 【音楽】「表現」という言葉が出てくるが、音楽の知識及び技能では「音楽表現」という使い方をして、思考力、判断力、表現力等の「表現」と区別していた。技能においては「音楽表現」という表し方にできないか。
- 【音楽】「思いや意図を歌唱や器楽で表す」とあるが、「思いや意図にふさわしい表現」「思いや意図に合う表現」のほうが適切ではないか。
- 【図画工作】思考力、判断力、表現力等の文末が「楽しく豊かに」となっている。楽しくは重要なので必要だが、高次の資質・能力では「楽しく」を越えてくる状況が考えられるため、ここに入れると違和感があるのではないか。
- 【美術・工芸】高校の美術、工芸の「思考力、判断力、表現力等」はSTEAMなども考えると「社会的な視点に立って」だけでは足りないのでは。科学的、産業的、美的などの視点も増やしていくべきではないか。
- 【美術】高校美術の「思考力、判断力、表現力等」を見る限り、各区分であまり違いが見えない。ほぼ同じような内容を繰り返すことにならないか。これなら区分に分けないほうがよいのでは。
- 【美術】「高次の資質・能力」の思考力、判断力、表現力等の「表現を身近な生活や社会との関わりから捉える」の文言は重要なキーワードなので、冒頭に「生活や社会」に対応する「対象や事象をもとに」という文言を入れてはどうか。
- 【音楽】音楽の思考力、判断力、表現力等の目標について、鑑賞の「聴き深める」には「味わう」をいれられないか。
- 【音楽】資質・能力では文末が「深めることができる」、鑑賞でも「音楽を聴き深めることができる」となっており、「できる」という言葉から思考力、判断力、表現力等の高次の資質・能力に表現と鑑賞の両方で技能が含まれているように感じる。この案のままだと、技能の概念とその位置づけについて混乱を招く恐れがあり、整理を行っていく必要がある。
- 【音楽】思考力、判断力、表現力等の目標について、「味わう」という言葉は現場の先生に浸透しているので追記いただき感謝。
- 【音楽】高校の思考力、判断力、表現力等の目標や見方・考え方との関連において現行の見方・考え方で示されていた「自己のイメージや感情」の「感情」がどこにも出てこなくなったなど残念に感じている。特に高校音楽は自己の感情に向き合うというのが大切になるのでどこかに入るとよいなと思っており、具体には「自己のイメージや感情に基づいた～」などとしてはどうか。
- 【美術】高次の資質・能力について、教科固有の学びと教科横断の学びの両立が大切だとすると記述内容はシンプルなほうがよい。ただし教科を学問として学びや特性を現場にわかりやすく示す必要がある。中学校美術の思考力、判断力、表現力等「豊かに発想したり構想を練ったり」の文言を「発想・構想することができる」などコンパクトでもよいのでは。

第1～8回芸術WGにおける主な意見⑭

【思考力、判断力、表現力等】（つづき）

- 【美術】思考力、判断力、表現力等について、高美の鑑賞領域では「自分と美術に関して造形的な良さや美しさを感じ取り」とあるが、近代的な美意識の資質能力が示されており、現代美術の要素が欠けていると感じる。現代美術においては既存の造形意識や美意識にとらわれない新たな価値や自由な広がりがあり、鑑賞領域では押さえておく必要がある。
- 【音楽】中学校の思考力、判断力、表現力等では「音楽表現について考え」とあるが、小学校の「音楽表現について思いや意図を持って」には中学校の「考え」が含まれていると捉えてはどうか。
- 【図画工作】思考力、判断力、表現力等は、統一した表現になっており学校現場でも受け止めやすい。また、「夢や願いを持って」という言葉が入った点は、どのような学びを導くかを現場の先生方に意識させるという点で、「正解の提示者」から「学びの伴走者」、「ファシリテーター」に転換させる働きがある。
- 【書道】他の芸術教科・科目と比較して書道は「美」という用語を積極的に用いている。高等学校芸術科で「美」というものを考えることが重要であるためそこに異論はないが、思考力、判断力、表現力等の、創造的・個性的に「美を表現する」という「美」については、やや抽象的な感じがする。

第1～8回芸術WGにおける主な意見⑮

【学びに向かう力、人間性等】

- 【音楽】学びに向かう力、人間性等については、子供の立場からの記載（楽しさを味わう、音楽活動に取り組む）と教師の立場からの記載（育む、養う）があり、整理する必要がある。
- 【美術】音楽や書道にも関係するかと思うが、学びに向かう力、人間性等について、美術でいうと「つくりだす喜びを味わいながら」の部分で「初発の～」を表現できているか疑問。
- 今回は知識及び技能、思考力、判断力、表現力等を議論しているが、創造性を豊かにするという芸術系教科では学びに向かう力、人間性等を常に考えていく必要がある。豊かな情操を培うということを常に考えながら知識及び技能、思考力、判断力、表現力等を考えていくことが重要。
- 学びに向かう力、人間性等については、思考力、判断力、表現力等の学習の中で見取るものとされていることをふまえると、今回の改訂において、思考力、判断力、表現力等が学習の中心を占め、それを支える知識及び技能、さらにその過程で育成される学びに向かう力、人間性等という関係性が示されていると受け止められる。
- 学びに向かう力、人間性等は、高次の資質・能力としては整理されていないものの、芸術教科として教育課程全体の中で果たす役割は学びに向かう力、人間性等の中に端的に示されるともいうことができ、音楽、図画工作・美術・工芸、書道に共通する、芸術に向かう資質・態度として、学校種ごとに示されることも検討されて良いのではないかと考える。

【価値】

- 【音楽】小中学校の目標でも高校のように「音楽教育では音楽そのものに価値があると認められるものを扱っている」という文言をもう少し明確に入れるよう検討してもよいのでは。音楽教育では芸術性を前面に出しすぎるのもよくないかもしれないが、学習指導要領では「情操を培う」と明記されており、解説には美的情操という言葉が明記されているので小中学校であっても、こうした観点から文言を整理していく必要がある。
- 【音楽】中学校音楽に「曲や演奏の価値などを考えながら～」と入っている。この「価値」について十分な説明が必要な一方で、逆に小学校と合わせた書き方で、たとえば「曲や演奏のよさや美しさなどを見いだしたりしながら味わって～」という、現行で使っている「音楽のよさや美しさ」の文言が残るとよいと思う。
- 「意味や価値を追求する」「見いだす」「つくりだす」等の差については、改めて各科目の話を聞きながら教科ごとの特性あるべきだが違いを説明できることが大事。

第1～8回芸術WGにおける主な意見①⑥

【資質・能力の整理】

- 【音楽】小学校音楽の改善の方向性に「習得した技能を生かして工夫するプロセスを思考力、判断力、表現力等として一体化」とあるが、実際の授業では子供が表現を工夫することから知識や技能に気づくこともある。そうした**知識及び技能と思考力、判断力、表現力等の往還を意識した授業が学びの深まりにつながる**のではないかと。
- 【音楽】**表現の工夫の具体化は重要**になる。表現の工夫の具体化のためには既習の知識や技能が必要なため学習の積み上げが期待できる。実際の授業には**思いや意図を持つ場面と表現する場面があるため段階的に指導評価されることが予想される**。学習評価の中で今後検討が必要になるのではないかと。
- 【音楽】「習得した技能を生かして」については知識も入ってくるのではないかと。
- 【音楽】鑑賞領域に技能が持ち込まれたのは画期的。
- 【音楽】鑑賞において次の音を期待しながら聴く力は高度な能力であり、すでに身に付けた知識を総合的に発揮する必要がある。その点を踏まえると、中学校の〔共通事項〕で「諸感覚で捉える」となっており、「知覚・感受」が消えて小学校との不一致が生じているのは、**発達段階によって生じる差異**だと認識。
- 【音楽】高校音楽Iの思考力、判断力、表現力等の「自己のイメージに基づいた音楽表現について考え」について、**自己のイメージありきではなく、イメージと考えることが並行して生じる文言だと良いのでは**。
- 【音楽】分かりやすさという意味で、**高次の資質・能力で示している内容を文言として目標に含めなくて良いのか**と考える。特に思考力、判断力、表現力等の目標について、中学校では「創造的に表現したり、価値を見いだしながら」、高校音楽では「創造的に表現すること」が、目標には記載されているが個別の資質・能力には記載がないため、高次の資質・能力に対応すると推測する一方、小学校の目標は個別の資質・能力と同じに見える。**小学校の目標にも「音楽が持つ価値」と入れるべきではないか**。
- 【音楽】余白を作るという観点については、指導が効果的に行われる内容でかつ先生方にわかりやすい示し方をすることを目指しているが、**今後全体を見渡して余白につながっているのか確認したい**と考える。特に小中学校では音楽科を全員学ぶため、子供たちにとって音楽科を学ぶことの意味がどこにあるのか、何を指すのかという視点からぶれずに、きちんと余白が生まれる精査を行う必要がある。
- 技能をどうとらえていくのかは今後説明できるようにしていかなければならない。ただ、自分の思いや考えを持つことにとどまらず、表現に生かしていくというような**知識及び技能と、思考力、判断力、表現力等を一体的に捉えるということについては評価したい**。
- 【音楽】小学校の思考力、判断力、表現力等は「表現したり」だが、中学校では「創造的に表現したり」となっており、義務教育9年間でどうつながるのかを明らかにすべき。そのためには**どこまでを目標に示し、どこからを事項、内容の取扱いとするのかを今のうちから整理すべき**。
- 【音楽】**知覚・感受をどう定義するかは現場の授業実践を念頭に考える必要がある**。「八長調及びイ短調」は内容の取扱いに移行する、といった具体的な改善例は現場の実践を念頭に置いた大変わかりやすい説明になっている。
- 【音楽】義務教育9年間のつながりを考えたときに小学校に「知覚・感受」という言葉が入ったのはありがたい。文章の形態もそろっていて伝わりやすいのではないかと。

第1～8回芸術WGにおける主な意見①⑦

【資質・能力の整理】（つづき）

- 技能に表現の要素が入ることは前向きに検討したい。
- 知識と技能を統合して一文で示すことによりスリム化だけでなく知識と技能が一体であることの強調にもつながる。
- 資質・能力の文末が「理解すること」になっているので理解や知的な要素が重視されている印象を受ける。
- 【音楽】思考力、判断力、表現力等で小学校は「知覚・感受し」、中学校は「諸感覚で捉えること」は、発達段階による差異であることはわかるが、一見すると中学校のほうがわかりやすい印象がある。小学校は専科の先生でない場合が多いことから今後改善が必要。
- 目標を短くすっきりしたことにより必要な情報が欠けている。創造的に表現したり鑑賞をしたりするために必要な技能を身に付けるという点で、この技能は創造性との関係で捉えなくてはならないし、他の場面にも生きて働く技能としても広く捉えなければならない。「表現したり鑑賞したりなどする」のように「など」を入れては。
- 【図画工作・美術】社会が子供に要求する社会軸に対して、自分軸を大事にすることが重要。
- 【図画工作】これまで工夫することは技能として整理されていた。これを思考力、判断力、表現力等に入れるのは大きな混乱を招くのではないか。特に技能はこれまで材料や用具を活用する側面と表し方を工夫する側面があった。後者が思考力、判断力、表現力等に入ること、技能が単なる材料や用具を扱うだけにとどまってしまうのではないか危惧。先生方に丁寧に説明しておく必要がある。
- 【図画工作】個別の資質・能力には「活動を工夫して表現する」とあるが、高次の資質・能力には工夫して表現するという要素が入っておらず、それがなくなると誤解を与えかねない。
- 【図画工作】造形遊びと絵や立体、工作の技能が同じ表現だが、果たして同じ技能といえるのか疑問。また造形遊びをやらなくてもよいという誤解を与えないよう説明が必要。
- 【図画工作・美術】領域としての「表現」は思考力、判断力、表現力等と知識及び技能の双方を含めた学びの総体である。その中での学びの深まりにおける技能は、活用できる資質・能力ということだけではなく、技能そのものやそれと結びついた総体としての表現でもあることに留意すべき。その点を踏まえると、図画工作・美術科の知識及び技能の高次の資質・能力には、「場面に応じて活用できる技能」という文言があるがこの表現には一考の余地がある。
- 【図画工作・美術科】技能は身に付けるものとされているが、音楽科では体の使い方を調整するなどとされており、この違いについて芸術教科全体の視点から説明が必要ではないか。
- 【図画工作】絵や立体、工作の思考力、判断力、表現力等の「夢や願い」には、子供が自分の気持ちを素直に表そうとする姿や生活や社会に対してこうなってほしいと問題提起する姿が含まれており、方向性をよく言い表せている一方で、造形遊びでは本質を言っているか議論の余地がある。
- 【図画工作】高次の資質・能力の思考力、判断力、表現力等の鑑賞では、自分や他者、生活における造形の意味や価値について考えると示されている。これは図画工作科の学習があくまで自分から始まって、それが友人に広がり、さらには地域社会へと開いていく様子を示しており適切であると考える。

第1～8回芸術WGにおける主な意見⑱

【資質・能力の整理】（つづき）

- 【図画工作・美術科】現行の学習指導要領ですでに内容をコンピテンシーベースで示してきていることから、単純に内容の量で精査する必要はそれほどないと個人的に考える。その前提で、絵や立体、工作と造形遊びなどにおいて共通する技能は統一的に表すと改善案に示されているが、この文言では造形遊びの技能も表したいことが先にあって、それを実現するための資質・能力としての技能という面だけに受け止められてしまい、造形遊びが正しく理解されない方向性に行くのではないかと危惧している。
- 【図画工作・美術科】鑑賞の技能を明確にするのは、鑑賞が表現と同等の創造活動としての意味を有することを指すため、非常に大事だと感じる。その上で、個別の資質・能力において、「見いだす方法」と記されているが、この書きぶりでは思考力、判断力、表現力等の意味合いが強くなるため「見る」や「見つける」の方がふさわしいのではないか。
- 【図画工作・美術】身体性・創造性を大切にしたい学習は、これまで本ワーキングで継続的に検討してきた重要な観点であり、現時点においても揺るぎないものとする。デジタル機器の活用が進展する中においても、実際に体を使って材料・用具を扱い創造していく学びは、図画工作・美術などの表現教科において今後も重要である。単なる技能の習得にとどまらず、活動を通して創造性を発揮しながら学ぶ教科であること、また問いを考え、答えを自ら作り出していく教科であることを、より一層重視すべきである。
- 【図画工作・美術】技能については、いわゆる表面的に身に付けるものではなく追究して学んでいくものであることを踏まえ、「表現方法を追求する」というような表現は、図工美術の技能が頭の中だけの思考にとどまらず、材料や用具を使って工夫して表すという一連の過程として捉えているため、非常に意味があると考える。
- 【図画工作・美術】高次の資質・能力については、学び全体を通して達成されるものであり、個別の資質・能力については、具体的なものになると認識しているが、この個別の資質・能力に柔軟性や多様性に対応できる「余白」が十分に確保されることが重要であり、見方・考え方や教科目標との関連を踏まえて検討する必要がある。
- 【図画工作・美術】鑑賞の技能を明確にすることで、深く鑑賞したり味わって鑑賞したりするためにはどうすれば良いのか、またどのような視点でどのような知識を使って鑑賞していくべきかといったことを示していく必要がある。
- 【図画工作】目標の知識及び技能において、「材料や用具を使い表し方を身に付けることができるようにする」と示されているが、音楽のように技能という表現ではなく、表し方という表現にされたところは良いと感じた。一方、知識及び技能に関する統合的な理解につながる内容であることを踏まえれば、材料や用具を用いた表し方というここだけにとどまらず、観察すること、調べること、経験について話し合うことなど、もう少し広く捉えることもできるのではないか。
- 縦と横の図は斜めの矢印や双方向的なイメージの矢印もあるのではないか。個別の知識及び技能が高次の資質・能力の思考力、判断力、表現力等にもつながることもある。
- 【美術】個別の知識及び技能で、「自分と美術」には美しさに気づく視点や知覚という内容もあるのではないか。また、「効果的な表し方の見通し」は「～の計画」などがいいのでは。
- 思考力、判断力、表現力等の個別の資質・能力は他教科とのつながりが表されると良いのではないか。新たな視点の獲得にもつながる。

第1～8回芸術WGにおける主な意見⑬

【資質・能力の整理】（つづき）

- 資質・能力の構造化の中で、「他の学習や生活の場面でも活用できる技能が習得されるよう、学習の深まりを示す」とあるが、**他の学習への活用だけではなく、逆に他教科で得た知識などを生かすことも読める内容にしたほうがいいのではないか。**芸術を通して知識を統合する経験を積むことが、これからの時代に求められる総合的な思考力と表現力を育てる鍵になると考える。
- **知識及び技能と思考力、判断力、表現力等の縦と横の関係図を示しているがこれはわかりやすい。**学校現場での説明にも使いやすい。
- 【図画工作】学校の現場にとって工夫して表現することが思考力、判断力、表現力等に移ることは大きな変更になる。**技能がどのようなものかは改めて考える必要がある。**
- 【図画工作】実際の授業では、作品が完成するまでにいたる過程で子供が工夫している姿や技能の高まりがみられるため、**作品よりもその過程をよく見ることが重要。**子供の高まりを引き出せるような指導やそれを体感できる素材の出会い合わせ方が必要になるため、そうしたことを理解したうえで改善の検討をしていかねばならないと考える。
- 資質・能力について、**技能を身に付けることと、発想や構想をしたことを工夫して表現することは別個に働くのではなく還元し合っ**て一体的に育成されることを示す、という点は非常に重要であると感じる。
- 縦と横の図の解釈について。左の知識及び技能を外的プロセス、思考力、判断力、表現力等を内部的プロセスとすると、創造とはまず外部の知識や技能を取り込むことから始まり、内部のプロセスを通じて作品が生み出され、外部に発信する。一方通行ではなく、繰り返し知識の獲得にも戻ることもある。**美術教育において学習者のこうした外部と内部の創造的往還が高次の資質・能力の獲得につながるのではないか。**今の図ではそうした往還がまだ表現が足りないのではないか。
- 【書道】成果物から表現力の習得状況を見取るという改善の方向性については理解している。現行の学習指導要領においても、作品は技能の観点から評価し、制作過程における思考や判断を言語化することで、思考力、判断力、表現力等の観点から評価を行っており、成果の中に作品という成果物を含めて考えていくことに異論はない。
- 【書道】**知識及び技能と、思考力、判断力、表現力等を、同一の作品から評価することになるため、両者の評価の違いが不明瞭にならないよう、具体的な評価方法や事例を分かりやすく示すことが必要**である。
- 【書道】書には「一回性」という特性があり、後戻りのできない中で瞬時に判断し、身体性を伴って表現する活動が求められることから、個別に学んだ書を構成する要素の特性が、作品としてどのように発揮されているかが、知識及び技能における資質・能力として位置付けられる。こうした観点から、**知識及び技能における資質・能力は、書を構成する要素の特性が総合的に発揮されることを目標としつつも、単元や学習段階に応じて、より低次の資質・能力として知識及び技能が統合的に発揮される学習場面も想定される**と考える。
- 【書道】書を構成する要素などの働きや関係を〔共通事項〕としてまとめて示すことについて、**学校や生徒の実態に応じて柔軟に取り扱うことが可能となる点は、現場の教員にとっても理解しやすいものになる**と考える。
- 【書道】思考力、判断力、表現力等について、これまでの意図に基づいて構想し工夫するということを示していたが、**構想を工夫し表現するという作品を表現するプロセス全体を扱うという整理は、より分かりやすくなるのではないか。**ただ、これは大きな転換にもなるため、**現場で混乱が起きないような明確な説明が必要。**

第1～8回芸術WGにおける主な意見⑳

【資質・能力の整理】（つづき）

- 【書道】I～IIIの目標について、感性についてはI、IIで「高め」、IIIで「磨き」となっている一方、伝統と文化についてはIで「親しみ」、II、IIIで「尊重し」となっており、この段階をそろえるのかあえて差をつけるのか検討が必要。
- 【書道】鑑賞の技能を位置づけることは賛成。これまでの各領域分野で個別に示してきた、字形、文字の大きさ、全体の構成等を〔共通事項〕の書を構成する要素の働きで整理するという方向性はとても良い。
- 【書道】書のその一回性や運動性、身体性という視点が表には出ない形になっているため、それらをどのように〔共通事項〕の中に組み込んでいくのか、あるいはその技能とどう関係させていくのかなどについて整理の必要がある。
- わかりやすさ、シンプルさを追求することによって教科間の平準化が起こるのであれば芸術科目特有の観点を損なわれなくしなければならない。
- 用語の一層の整理検討について、「高次の資質・能力」という表現はどうしても高低を想起させるので一考の余地あり。
- デジタル化によってわかりやすさにつながる。必ずしも文言の精査だけがわかりやすさにつながるわけではない。
- 【図画工作・美術】材料や用具を生かし、表現方法を追求すること、子供が自分の技を追究していくことは、実感を伴いながら、そして肌で感じながら体感的に高まっているということを理解できることが重要と考える。この表現方法を追求することは生きていく中で様々な場面で活用できると考える。
- 調整授業時数制度については、多様な個性や特性、背景を有する子供たちを包摂する柔軟な教育課程編成を促進できるという点で効果が期待できる。図画工作・美術科等の芸術教科にとっても少ない授業時数をこの制度を活用して増やすことができることも考えられる。しかし、例えば現行の中学校美術第1学年45時間の授業では逆に減る可能性もある。単に授業時数について問題にするのではなく、子供たちにどのような力を身に付けさせたいのか、何を学ばせる必要があるのかをより一層考えていくことがさらに重要。
- 企画特別部会では、思考力、判断力、表現力等については、これまでに習得した知識や技能を活用して実社会・実生活などの場面を想定した課題解決に近い形で資質・能力を発揮するという性質の柱が示された。一方、これまでに習得した知識や技能の「活用」には教科ごとに幅や多様な捉え方があるため今後より丁寧な整理が必要であると考えます。
- 個別の資質・能力の整理に関して、題材構成は学校の地域性に大きく影響を受ける。題材構成の工夫という観点は、単なる授業時数の調整にとどまらず、地域性や学校の特性、多様性を踏まえた柔軟な題材・単元開発を可能にする重要な視点である。とりわけ、新たな題材や単元の開発に積極的に取り組みやすい環境を整え、目の前の子供たちにとって最適な学びを構想できるよう後押しする学習指導要領となることを期待する。
- 小学校音楽の思考力、判断力、表現力等の資質・能力における〔共通事項〕の削除については再検討が必要である。
- 授業プロセスの可視化に関する題材計画作成のイメージは分かりやすく、特に小学校において有効である。一方で、具体的に示すことにより、「こうあらねばならない」という限定的な解釈につながるおそれもあるため、示し方については慎重な検討が必要である。
- 題材計画作りの参考イメージで示されている内容は、児童生徒の自立的な学習を促す観点から、何らかの形で児童生徒と共有し、何ができるようになればよいかを踏まえて自分で学習の進め方を考えていく必要があると考える。どのように共有していくかについては今後検討をしていきたい。

第1～8回芸術WGにおける主な意見②

【資質・能力の整理】（つづき）

- 年間を通して資質・能力を育成する視点は重要であるが、教科書を順に扱う授業に慣れている教師にとっては難しさもある。一つの教材で多様な学習活動を展開できる構成は魅力的である一方、**専門性や時間を要する点で負担となる可能性もある。**
- 高次の資質・能力の示し方について、**他教科と比べて複雑な印象**がある。芸術系教科の特徴やポイントが、読んですぐ理解できる整理が望ましい。
- 題材計画作成のイメージは、特に経験の浅い教師にとって有用である。高次の資質・能力の思考力、判断力、表現力等において新たに「**気づき**」という言葉が加わったが、その内容を改めて整理する必要がある。
- 示された題材計画書は新規性が高いと感じるため、**現行の学習指導案に基づいた構成の方が受け入れやすいのではないが。**
- 鑑賞の技能について、造形的な特徴、造形の要素などのいわゆる鑑賞対象の属性に加え、**もう少し具体的に鑑賞者の思考・判断を引き出せる観点の提示にも踏み込んでどうか。**
- 題材計画書は高次の資質・能力を分かりやすく示す点で有効であるが、**従来の指導案からの変更点について十分な説明が必要である。**
- 高等学校芸術科の**最初や最後で芸術は何かを示す意義がある。**
- 構造化を単元や授業作りに生かすプロセスを可視化すること自体は重要であり、教師にとって分かりやすい。一方で、**題材計画書のイメージはむしろこれまでの指導案から変わっていないように感じる。**基本を踏まえながらも、そこに**先生方の授業デザインに対して創造的なイメージを促すことも考えられる。**
- 単元計画作成のイメージは作成にかかる労力や時間の負担を軽減することにつながる利点もあるが、**教師が授業を構想する上で、教師なりの工夫の余地があるものにすべきである。**
- 現在の示されている計画書のイメージでは、学習活動が一定の流れに沿って進んでいるが、**従来の学習指導案の様式に囚われない新しい様式も必要ではないか。**他教科の個別最適な学びに即した学習指導案の作成事例等を踏まえて、より良い示し方を考えていくことも必要。
- すべての単元で学習指導案を作成することは困難であるため、計画例を示すことは簡単に作成が可能になる一方で、**芸術科教員の持つ授業のアイデアも重要なので授業計画が画一化しないよう配慮も必要**である。
- 芸術科の各科目の学習の**初期段階と最終段階とで、見方・考え方がどのように深まっていくのか**という記載があると良い。
- 工芸については**地域性との関わり**も大きいので、そうした視点を踏まえた題材づくりに、**若い先生方が意欲を持つことができるような、授業づくりイメージとして広まっていくことを期待**する。

第1～8回芸術WGにおける主な意見②

【鑑賞】

- 鑑賞は子供にとって大切な学びである。形や色などを根拠に鑑賞することはできている一方で、その先の文化についても出会えるようにしていくなど、鑑賞を深めていくことが大切
- 実体験を重ねていくことが物事を見る精度を高めていく。自分の感覚を十分に実感した上で鑑賞することにより、見えているものの向こう側にある作家の息遣いや緊張感、深みなどが感じ取れ、深い学びにつながる。
- 現代アートにあるような、作品の中に内在している人類の願いや差別への叫びなどに着目し、鑑賞の中で学んでいくことが重要。時代や社会について考えるきっかけになり、課題や問題提起をしていける視点をもつことにもつながる
- 作品をどのように捉えていくのか、表現された世界をどのように読み解いていけばよいのか、鑑賞者を育成することが重要。鑑賞のプロセスの具体的手順や方法といった鑑賞の深化を発達段階を通して段階的に育てていくべき。事象を分析的に捉え、批判的に物事を捉える力はあらゆる教科・科目に通底する資質・能力である。
- 感性や感じ取る力は非常に重要。観察や鑑賞を通して心が動く体験を子供たちができるようにしていく必要があり、自分や他者の感情を自覚し受け止めることが大切。
- 【音楽】小学校の「曲や演奏のよさや楽しさ」「音楽を聴き深める」というキーワードは重要。一方、中学校では、思考力、判断力、表現力等に「評価しながら」が含まれるが、客観的な部分が前に出すぎているので、小学校と同じような形（「見いだしながら」）もありえるのではないか。
- 【音楽】「聴き深める」について、学習の向かうべき方向性が示されている。ただ、「味わって聴く」という表現には、音楽に浸るとか、全身体で聴くというニュアンスが含まれている。これまでも使ってきた「味わう」という文言が消えてしまうのは残念。
- 【図画工作】「生活や社会、文化と関わり」が入ったのは有意義。生活、社会、文化の視点を見方・考え方に取り入れることによって、作品や美術館、博物館、文化財などを教師が授業に取り入れる必然性が生まれる。時間軸が子供たちの中に自然に意識づけられると共に、鑑賞の意義や学ぶ意義が伝わりやすくなるのではないか。
- 【美術と図画工作】適切なタイミングで理解が深まったり新たな気づきが生まれたりする情報を提供することが不可欠。発達段階の話も出たが、どのような知識を伝えていけばよいのかという視点が現場では弱い。次の作品を見る時に鑑賞を深めて作品を深く味わう力に繋がってくる。
- 【書道】思考力、判断力、表現力等の「感じ取り」について、鑑賞の際は、書かれた言葉を読み取って理解し、自己と向き合い再度作品と対峙したり、時間をかけ何度も鑑賞したりすることで書の良さや美しさを理解できる。「感じ取り」としてしまうと、文頭の「書のよさや美しさを感じし」と似通ってしまうのではないか。
- 【音楽】A表現を「歌唱・器楽」「音楽づくり」に分けることは賛成。歌唱と器楽という垣根を越えた、新たな発想に基づく題材構想に期待。
- 【美術】「活用して作品等を読み解いていく」ことは鑑賞の技能となりうるのではないか。
- 【図画工作】鑑賞の技能を位置づけることは有意義と考えるが、図画工作・美術では技能を「創造的技能」としており、技能をテクニックと捉えられないようにすべき。「体を使う」とあるが、「体」よりも「身体」のほうが良いのではないか。音楽では「身体」を使っている。

第1～8回芸術WGにおける主な意見⑬

【鑑賞】（つづき）

- 【**図画工作**】**感じ取ったことを他者に伝え共有することも鑑賞で必要な技能ではないか。**
- 【**美術**】**中学校美術の鑑賞における「実感を伴って理解している」について、子供たちの学校での姿をイメージしてみるとよいのではないか。**例えば、中学3年生が美術館の作品を鑑賞した際、鑑賞を通して美術のおもしろさを再確認し、身近な美術を見てみたくなったという感想があった。**高次の資質・能力について、子供たちのどのような姿に現れるのかを学校の先生方にわかりやすく伝えることが必要**なのではないか。
- 【**美術**】イギリスTateによると、美術館や博物館で作品を鑑賞する平均時間は8秒とされており、大人も子供もよく見るということをしていない。また、見る視点をつかみにくいとされている。**子供はよく見ること、見ることで情報を掴むことができていないことを踏まえると、中学校美術の鑑賞の区分の現案は、授業改善につながるという意味でも、子供たちが自分で何を学んで身に付けたかわかるという意味でもとても良い。**
- 【**美術**】子供たちは今たくさんの情報に囲まれており、その中で何をすることも早いほうが良いとされ、よく見ることができていない。**授業の中でそれができるようにしていくことが大事。**鑑賞領域における思考力、判断力、表現力等で「見つめ」などと記載があり、知識及び技能では「情報を読み取ることにより」などとほつきり視点が示されている。**先生方にとっても子供たちにとってもじっくりと「見る」ことに向かえる手だてになるのでは。**
- 【**音楽**】「知覚と感受」について考えたが**技能に位置付けると音楽の聴き方の基本である知覚や感受の定義づけが必要。**知覚を「音を適切に聞き取る能力」だとすると技能と整合する。また感受を「知覚した情報を自分の過去の経験と結び付け音のはたらきを解釈すること」だとすると、これも経験の蓄積によって深まる技能として整合する。ただし**感受という言葉には主観的な感覚というイメージがあるので技能として扱うことに少し疑問が残る。**また、**知覚と感受は一体的なものであるため、これを明確に分離してしまうのも実際の音楽の聴き方として成立しなくなってしまう恐れもある**点に注意が必要。

【充実感、達成感】

- 楽譜を読む技能など、粘り強く学習しなければ身に付かない身体的な技能を習得する過程で**達成感**などを感じることができ、これが学びに向かう力・人間性等にも関わってくるのではないか
- 表現や鑑賞の前提として、子供の感覚や情意、感性が位置付いていることが必要。子供が教師に伝える「できたよ」には3つの意味があり、①作品・発表ができたという意味、②イメージできたという意味、③私ができた、という意味がある。「私ができた」に対して、活動において**子供の感覚や情意、感性が働いた表現や鑑賞**として捉えることが教師には必要である。
- 【**図画工作**】学びに向かう力・人間性等に「楽しく」が位置付いた点は理解できるが、**学習に対する子供の情意的な心づもりが必要**であり、「楽しい」や「楽しく」が表面的な感情ではなく、その意図が通じるように表していくことが必要。
- **「楽しさを味わう」や「喜びを味わう」などの使い方が各教科微妙に異なり、教科の特性から考え直す必要があるのではないか。**芸術系教科では特に大事な部分であり、学校において目指すべき、学びに向かう力、人間性等としてどういった表現が良いか精査する必要がある。**「達成感を味わう」のように内発的な動機付けが高まることに関連する文言を含め、改めて検討していくことも必要。**

第1～8回芸術WGにおける主な意見②④

【豊かな社会の創造や幸福な人生】

- 創造性は、自分なりの意味や価値をつくりだすことに留まるのではなく、**社会との関わりにおいてベクトルを外へ向けていくことが重要。**
- 芸術系教科は感性や情操の育成につながる審美教育である。価値を実感できることにより積極的に学びに向かっていく力につながり、**価値が生活や社会を豊かにすることにつながるということに実感**がもてるようにすることが重要。
- 芸術を通して豊かな人間性を涵養し、創造性・感性を育み、**情操を培っていくことは豊かな社会の創造において不可欠**である。
- 伝統と文化や文化芸術の意義を明確に位置付ける必要がある。日本の文化と世界の文化を知り、比較して学んでいくことや**多文化理解**はこれからの社会に必要な資質・能力であり、生活や社会とのつながりにおいて**芸術が幸福な人生や豊かな社会の創造に繋がる**ことを、表現や鑑賞を通して実感をもって学習することが大事。
- 【音楽】見方・考え方の後段、「自分や他者にとっての意味や価値を見いだす」とあるが、**高校では少し広げて他者を「社会」とし対象を明確にすること**もありうる。学びに向かう力・人間性等の中で、「豊かな生活や社会を築いていく態度を養い」とあるので、具体的に示していくこともあり得るのではないか。
- 【図画工作】造形美術の働きを位置づけることは賛成。**自分、他者、自他の関係性や地域、社会、文化と対象に広がりがある。**地域、社会、文化に対する働きは、役に立つと狭義で捉え得られがちだが、図画工作科では、**自分に対する働きがあつてこそ地域、社会、文化への働きも成立する。**
- 【美術】「生活や社会、文化と関わり」の部分について、**創造性を身に付けた結果、生活や社会の豊かさにつながる**ということについて目標での明記が必要ではないか。
- 学びに向かう力・人間性等について、相手がどのような感性、考えで受け入れるかという、**受け取る側を考えると多様性を尊重することや社会に繋がっていく**ので、その点を強調してもよいのではないか。
- 【美術】地域の文化や美術教育を子供に教えるのではなく、**子供と一緒に教師も学ぶことを通して、日本人としての美しい生き方、豊かな生き方を理解できる**と考える。文化の理解を誤解して受け取られないように、知識の中に位置付けるのであれば、「美術の働きや美術文化を理解する」という文に**「実感的に理解する」と追記**できればよい。
- 【図工、美術、工芸】生活、社会、文化との関わりが示されているが、**それぞれの教科・科目で関わりニュアンスが異なるのではないか。**
- 【書道】目標に「作品や書の美と」とあり、**芸術的な書作品以外の書も含め社会とのつながりを考えていく方向性**を理解した。ぜひ進めてもらいたい。
- 小中高に共通することだが、資質・能力（概略）で身近な生活と社会と美術の共通事項で「美術の働きや美術文化について理解する」とあるが、具体的な例示がまだない。観察力ひとつとっても各学年で違う。**他の教科や暮らしの中でも課題を正確に取り出せる能力として観察の個別具体的な能力を位置づけていくのが子供たちに芸術教科の存在意義を実感させることにつながる。**今後検討いただく段階でそのあたりを意識してもらいたい。

第1～8回芸術WGにおける主な意見②

【教科横断や連携の在り方】

- 概念理解は国際バカロレアの学びと共通していると感じている。教科は教科として学び、**教科等横断的な学びは表面的なつながりではなく、本質的な概念で繋げていく**
- 他教科にも汎用できる資質・能力について。現行学習指導要領には「知識を相互に関連付けて」と記載がある。双方向性の学習が重視されているが、他教科に影響を与えるだけでなく、**他教科で身に付けた力を芸術系教科で使うこともあり得る。**
- 芸術教育で育まれる他教科に汎用する資質・能力は、**想像力、試行錯誤する力、挑戦する力、リスクをとる力、自ら問いを立て考える力、答えのない問いに最適解を見つけ出す力、多様な解を互いに認め合う力**が考えられる。
- **芸術はSTEAMのAの役割として新たな気付きを生み出し、粘り強く解をまとめる教科としての関わりがふさわしく、**探究的な学びを深めるためには、その側面から芸術系教科と他教科との連携が重要。子供たちの思い付きや失敗を受容する環境の醸成が大事
- 日本型のSTEAM教育をどうつづけていくか。STEAM発祥のアメリカと日本とは歴史や考え方が異なる。**STEAM教育は教師自身のマインドセットの向上にもつながる**のではないか
- STEAMは理科系に偏りすぎているのではないか。もっと**Aの学際性に着目**してもよいのではないか。
- 【図画工作・美術】**イノベーションに繋がる相互に関連付ける力が芸術系教科・科目の重要な資質・能力。**作品に至るまでの過程を重視することが大切で、生活・総合的な学習の時間における探究のプロセスと図画工作・美術における探究・創造のプロセスの共通点・相違点踏まえながら、知識や技能を考えていくことが重要。
- 【メディア】**映像分野は教科を繋ぐハブ**である。物語構成や言語表現での国語、社会課題を考える社会、観察としての理科、論理的思考としての数学、外国を意識したコミュニケーションとしての外国語など。芸術の他分野にも密接に関わる。
- **小中高全体で各教科・科目を俯瞰し、見方・考え方を再構築していくことも重要。**学びの深まりについて、**書道では小・中の国語科書写とのつながり**があることから国語科書写との連携が重要。文字文化の考え方を再整理する必要があるのではないか。
- 地域社会と学校をどう連携させていくかが重要。**芸術系教科の重要性を地域社会にどう理解してもらうか。**その上で、**他教科との連携はこれまで以上に重要な視点**になってくる

第1～8回芸術WGにおける主な意見②⑥

【区分】

- 【図画工作】区分の示し方は賛成。「造形遊びをする」「絵や立体、工作に表す」についてはもう少し抽象的な内容でもよいのでは。
- 【美術】区分が「自分と美術」「身近な生活や社会と美術」という分け方は、教師もこの分け方は違和感は少ないのではないか。
- 【高校美術】「自分と美術」「社会と美術」という区分に違和感。自分を考える際には社会を考えることにつながるし、社会を考えるときにも個人（自分）の考えは重要になる。分けることによって行き来を断つことになってしまうのではないか。
- 【美術】美術の区分について妥当な判断と考えるが、今回の改定の目玉でもあるので、十分に時間をかけて議論するべき。
- 【美術】区分はわかりやすく示されている。「自分と美術」「身近な生活や社会」は思考の過程の違いで分けられているので、授業が作りやすい。A表現とB鑑賞が同じ分け方なので一体化しやすいのもよい。
- 「自分と美術」「社会と美術」の区分は近代から現代の美術史からみて適当ではないか。「社会と美術」について、60年代以降はジェンダーや環境などのテーマが増えた。2010年ごろからはソーシャルプラクティスなどが実践されている。伝統的な絵画や彫刻の手法と変わり、アーティストと観客の区別がなくなったり、討論や教育が行われたりするという、現代美術における社会とのかかわりの手法を学校教育に取り入れるのもアリではないか。
- 高校工芸について。美術は絵画や広告、メディアなど、表現のジャンルで内容を分けているのに対して、工芸では以前から学びの方向性で区分を設けていた。工芸には技法がたくさんある。それらの技法ごとに記載を分けるのではなく、方向性のみを示すことが従来から続いているが、その方針で成功しているように感じる。
- 区分を「学習の方向性」と捉えるのは良いと感じた。
- 【図画工作・美術】区分について。教科の特質や現状の課題を踏まえたものと理解しているが、区分に分けるということは、子供が発揮する資質・能力には方向性があるというのを示す必要があるということの意味しているのではないかと考える。そうした説明をどこかで丁寧に説明する必要があると考えている。
- 【図画工作】高次の資質・能力の区分について、区分を設けることはよいと思うが、図画工作の区分が少し具体的なのではないか。美術制作や表現も重要な活動だが、区分としては抽象的なテーマやコンピテンシーベースのテーマをつけることも考えられるのでは。個人の自己表現だけで考える部分と、客観的視点が求められる他者との活動に分けることや、個人の探究と他者との探究などに分けることも考えられるのではないか。
- 図画工作の区分が新しくなっており、子供の思考の方向性が整理されたと感じている。ただ「自分と美術」の区分名を踏まえると、「身近な生活や社会と美術」という表現の「身近な」は必要ではないのではないか。
- 図画工作・美術の区分がコンピテンシーベースに整理された点は評価できる。
- 新しい区分に合わせた単元構成を示し、表現者と鑑賞者としての学びを相互に組み合わせた学びの深まりができる構成を取り入れることができるのではないか。

第1～8回芸術WGにおける主な意見②7

【地域連携】

- コミュニティの規模や密度が地域によって多様化しており、地域連携の在り方を一律に示すことは難しい一方、学習指導要領においては一定の方向性を示すことが必要。
- 【音楽】地域連携の強みは、学校だけでは得難い優れた技能や経験をもつ人材を招き、児童生徒が質の高い芸術体験に直接触れられる点にある。他方、音楽には学習の方法自体にも地域や国の伝統が息づいており、その「学習の文脈」を踏まえた継承の観点が不可欠である。学校が地域と協働しつつ、校内に自律的な伝承の仕組みを構築する方向性を学習指導要領にも示すことが望ましい。
- 地域の力を借りるという発想だけでは、地域人材への依存や学校への一方通行になり、発展性が乏しくなる恐れがある。「連携」の名の下に丸投げに陥ることのないよう、自律的な連携と文化の継承の仕組みが必要。
- 地域連携は、教員にとって人・物・金・時間の調整などエネルギーを要するが、教員が人と人をつなぐファシリテーターとしての役割や調整力を育むうえでも非常に重要である。
- 【美術】学校教育の中だけでは見えにくかった「子どもの地域への思い」や「地域が子どもを思う気持ち」を目に見える形にするのがアートの役割と考える。連携に先立ち、各教科が学校教育目標に照らし「今ここにいる子どもたちの実態から何ができるか」を起点に構想することが重要で、教師の願いだけでなく子ども起点で創出されることが望ましい。
- 【美術】教員や学校がまず地域の良さや課題に目を向け、総合的な学習等と結び、美術科こそ社会に開かれた教育課程を牽引すべきである。
- 地域連携において「文化」は重要なキーワードである。我が国には多様な文化・芸術が広がり、将来に受け継ぐことが重要。地域連携を通じて我が国の芸術文化に触れ、グローバル化の進展の中で、郷土や自国の文化を語り紹介できる力の育成が必要。
- 【書道】「生涯にわたり芸術を愛好する心情」の育成の観点から、鑑賞者を育てる視点が十分でないという課題がある。博物館・美術館との連携や、遠隔地でもデジタル活用により鑑賞体験に向かう素地を養う取組が重要。
- 見方を発見していくという子供たちの姿は、美術館など様々な地域との連携で見えるところで、鑑賞の技能にもつながる。
- 学校だけでなく、行政や地域が連携して後押しすることが重要。例として、さいたま市のうらわ美術館には教育委員会の指導主事が配置され、学校との連携（出前授業、作品貸出し等）が機能している。文化施設から遠い学校の児童生徒にも体験機会が行き渡るよう、行政・地域の連携による環境整備が必要。
- 「地域」と一言で言っても学校の立地状況により状況は大きく異なるため、まずは各校の現状に即して考えることが大切。
- 地域の物的・人的資源の活用は、保護者・PTA、地元町会との連携など身近なつながりから芸術資源へと広げていくことが可能。いきなり著名文化人や伝統工芸へ飛躍せず、現場が無理なく連携できる在り方を検討したい。
- 学校現場だけでなく行政との連携による後押しが重要。博物館・美術館等との結び付けをより積極的に検討し、自治体の多様な状況も踏まえ、国や国立アトリサーチセンター等の活用も選択肢となり得る。

第1～8回芸術WGにおける主な意見②

【地域連携】（つづき）

- 芸術が社会と学校、教科間をつなぐハブとなり、芸術教科は教科横断的学習を通じて地域・社会とのつながりを強める。児童生徒にとって豊かな学びにつながる意義は大きい。
- 連携で最も重要なのは、育成すべき資質・能力の共通理解が関係者間で成立していること。成功事例では自明化しがちだが、機微な対応・関わりの積み重ねが前提にある。また、学習指導要領を学校外の人を読んで理解できることも不可欠の前提である。
- 連携では各芸術科目の見方・考え方が学習プロセスに正しく位置付くことが必要。特に小学校では全科担当のため、音楽科や図画工作科の見方・考え方が正統に位置付くことが重要。また、図画工作科が単なる「ものづくり」に手段化されないことが重要。
- 連携先は自明化された文化施設に限らず、CSRで子どもの芸術活動を支援する企業、公園やショッピングモール等の生活の場など、従来自明でなかった対象も今後見出していく必要がある。
- 芸術科の学びのフィールドが地域へ広がることで、学びはより探究的になる。総合的な学習の時間で出会った地域課題を自分事化し、音楽科等で取り組むことで、生涯にわたる芸術の意味の探求や知識・技能の追求につながる。
- 地域の芸術文化との関わりを持続可能にするには、教員だけが担うのは困難。芸術科の使命の一つは文化の担い手の育成であり、学校運営協議会等と教科・地域の願いを共有し、地域が担い手となる仕組みづくりを働きかけていく必要がある。
- 芸術文化の体験的学習は、日常では味わえない空気感によって子どもの心を開き、新しい価値を学ぶ機会となる。この機会を生かし、単なる鑑賞で終わらず学びへ転化する視点が重要。演劇分野では観客から舞台側への当事者性の転移により学習の転移のエビデンスが認められていることも参考となる。
- 地域の伝統芸能・伝統工芸の学習では、美的体験に加え、地域資源を生かすための先人の苦心と産業化の営み、経済的効果等を知ることが特に高等学校段階で大きな意義をもつ。
- 【小学校音楽】現行学習指導要領の「学校内及び公共施設などの学校外における～」の表現は、文化資源が多様化する中で限定的イメージを与えうる。例えば「文化施設など」とする、または「公共施設などの」の文言自体を削除する等の検討の余地がある。
- 本物に触れる体験を年間指導計画や学校全体の教育活動の中でどう位置付け、指導事項や資質・能力の育成に結び付けるかが重要。中学校・高等学校では授業時数や業務量の制約が課題であり、地域と学校をつなぐコーディネーター的役割の配置が有用である。
- 美術教育に関連する表現分野は多様な広がり、高度化が進んでおり連携はますます必要。映像メディアを用いた表現は従来の造形表現とは全く異なる表現手法の理解や習得が必要だが、社会にニーズがあるし、社会に貢献が可能。たとえばリタイアした映像制作経験者や地域のアーティスト、美術系大学の学生などの外部の多様な人材と連携して一緒に教育プログラムを作り上げていくことが重要。その連携を進めるために制度設計などが必要になる。

第1～8回芸術WGにおける主な意見②

【地域連携】（つづき）

- 「開かれた教育課程」にはさまざまな意味があるが、芸術系教科・科目における外部人材や学校外の文化施設等との連携は、中でもその扉を開くものとして重視されるべきもの。
- 芸術系教科・科目の「見方・考え方」案である「意味や価値を見出すこと(音楽)」「意味や価値をつくりだすこと(図工・美術)」「意味や価値を追求すること(書道)」は、教室中での学習の方向性を示しているが、同時に、子どもたちが将来において社会の様々な文化芸術と出会う場において発揮されるべき資質・能力の在り方を示しているとも言える。
- 「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」によって計画された教室での学習とは違った、「学びに向かう力、人間性等」も含めた混然とした体験的学習が、芸術系教科・科目における外部人材や学校外の文化施設等との連携による学習にはある。むしろ、社会での様々な文化芸術との出会いのプレ体験をしているとも言える。
- 外部連携による学習と通常の授業との関連性は十分検討されるとしても、これを通常授業と同じように「高次の資質・能力」による学習の構造化を当てはめるには無理がある。**「ホンモノ」を通した、学びの真正性を担保するものとして外部人材、学校外の文化施設等や地域との連携は考えるべき。**

第1～8回芸術WGにおける主な意見③〇

【高校芸術科の学びの改善・充実】

- **高校**においては、音楽・美術・工芸・書道と科目が分かれてしまうが、**芸術教科全体として学ぶ意義を考えることは重要**
- **高校のどの科目**においても自分や社会にとって芸術がどのような**意味や価値をもつのかを学ぶ**ことは、人生を豊かに生きていく観点から**重要**
- 作品をつくっていくというプロセスの中に、**創造性、批判的思考、問題解決能力、協働性、コミュニケーション能力、ICTリテラシー**といった重要なスキル、能力の開発が含まれている
- 並行パターンはⅠ～Ⅲの資質の深まりを一見してとらえやすいが、**思考力、判断力、表現力等の統合的な発揮と知識及び技能の統合的な理解を捉えるのは並行パターンでは難しいのではないか**。例えば、高等学校の科目の履修が必須履修科目であるⅠを付した科目で終える生徒が多いということをふまれば、**高等学校芸術科においては、全体を並列パターンで示していく検討の余地もあるのではないか**。
- 高等学校芸術科全体の見方・考え方が、各教科の要素を組み合わせた形で提示されている。この部分を、**教育課程全体における芸術教科において、何を学ぶのか、どのような方向性なのか明確にさせる必要がある**。
- 高校芸術科の見方・考え方について、方向性としてはまとまりが出て良いと思うが、「**美を構成する要素とその働き**」と「**文化などの視点**」のレベル感に**差異を感じる**。「美を～働き」は具体的だが、「文化などの視点」は人間の営みの観点で大きなところで捉えられる。今後ふさわしい言葉が示せたらよいと思う。
- 見方・考え方の高校芸術科目の一覧において、並べて見たときに語尾が大事だと思った。音楽では「意味や価値を見いだす」、書道では「追求する」、美術では「つくりだす」の**語尾が示す共通性や連関について各教科の高次の資質・能力から考える必要がある**のでは。
- 高校芸術科の各科目の目標について。美術Ⅰ、Ⅱ、Ⅲと工芸Ⅰ、Ⅱ、Ⅲにおいて日本語の表現として少しの違いである。方向性としてはよいと思うが、**より評価の観点として現場がわかりやすいものになるとよいのでは**。たとえば学びに向かう力、人間力等の「感性を高め」「美意識を高め」「感性と美意識を磨き」など系統性が示されているが、**評価だと曖昧さがあるかと思うので今後工夫できるところ**であるかと思う。
- これまで学習指導要領冒頭の芸術科の目標が十分活用されてこなかった。義務教育段階では「芸術」という横断概念に触れる機会が乏しいため、小中の学びを発展させ、高等学校段階で芸術の意義・価値を再認識する機会の設定が望ましい。現行改訂で新設された〔共通事項〕を踏まえ、**芸術科を貫く共通の指導内容を示すことは次期改訂の大きな視点となる**。
- 改善の方向性としては、**各科目の導入段階で、芸術の多様なジャンルや表現形式、日本文化の独自性を認識しつつ、選択科目としての学びを再認識させるのが良いのではないか**。また、まとめ段階では、表現・鑑賞の学習成果を踏まえ、文化芸術の広がりや多様性、社会における芸術の役割、芸術を学ぶ意義や価値について自覚させることで生涯にわたって芸術を愛好していくことにつながる。
- 示し方について。芸術科全体を貫く内容は評価に適さない可能性があり、**目標や見方・考え方の解説で趣旨を示し、各科目の内容の取扱いに共通文言を置くなど、実践上の負担に配慮した整理が必要**。実現に当たっては、教職員支援機構等による教員研修、教科書の冒頭への反映、入学前配布の説明資料への掲載、実践検証協力校での事例蓄積・提示が有効ではないか。

第1～8回芸術WGにおける主な意見③

【高校芸術科の学びの改善・充実】

- 高校段階では、芸術の学びを外に向けるメッセージが重要。例えば学びに向かう力、人間性等における文言を「芸術を通した学びによって心豊かな生活や社会をよりよくする」等に見直す、また「情操をより豊かに高める」等の表現を検討してはどうか。OECDのエージェンシーの観点からも、社会を支え、創る主体性の意識化が要となる。
- 高校では、普通科目以外の科目を創設するのは急には難しく、まずは既存科目の指導事項・内容の取扱いに趣旨を反映することが現実的である。小学校・中学校9年間プラスIを付した科目とあわせて10年間の学びの集大成として、この先の芸術文化との関わりを自覚させる場面があってもよいのでは。
- まだ実践が足りないので、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）のようなモデル校の指定や文化庁で取り組んでいるCBX（Cultural Business Transformation）等との連携による実践蓄積が有効ではないか。
- 科目の専門性を担保した上で「芸術とは何か」を考えさせることが重要。複数科目を開設する学校では、年度初めに各科目教員が意義・目標を語る場の設定や、Iを付した科目のまとめを合同授業とし相互発表・熟議を行うことが考えられる。単科目校では校外学習による他分野施設の訪問や他分野専門家の講演等の工夫が有効。いずれも内容の取扱いで示すことで実施可能と考える。
- 【書道】小中の国語科書写との接続は従来からの課題であり、高校導入期に「芸術としての書」を扱う実践が広く行われ、教科書でも冒頭に記載がある。一方、音楽・美術・工芸が義務教育段階の学びから高校の芸術科へ円滑に接続できているか、また高校教科書の冒頭に芸術としての意義付けがあるか等の確認が必要。芸術の学びの方向性が示されることは、科目横断的に協働した作品制作等の一層の推進にも資する。教員の過度な負担とならないよう、事例・教材の公開・共有や十分な支援、わかりやすく柔軟な内容での明示が必要。
- 研修や教科書の工夫が鍵。各科目の冒頭で「芸術とは「美」「芸術文化」等を考える導入ページや、課題研究のヒントとなる構成があると、教員・生徒ともに展開しやすい。中学校段階でも「芸術における音楽／美術／書道」といった領域意識を持たせる工夫によって芸術教育が魅力的になる。教員養成でもこうした視点の重視が望まれる。
- 【美術】今日の芸術は総合芸術として発展しており、映画・アニメーション・ゲーム・舞台芸術等、複数分野を統合して新しい表現を生み出す力の育成が重要。現行の美術 I における映像メディア表現を、従来の造形専門だけで担うのは限界があり、メディアアート等の総合芸術分野を高等学校芸術教育に明確に位置付けることが時代に即した改革となる。他分野の時間数を削らず、芸術教育を超えた広い領域として捉えることを検討すべき。
- 【音楽】鑑賞者、批評者として育つことの大切さについて。よりよく表現することとよりよく聴くことは表裏一体であり、音楽の構造理解に加え、文化的・歴史的背景の理解を投射して聴くことが重要。批評者としての資質をもつ友人との対話環境を得ることが高等学校で専門的に学ぶ意義の一つであり、鑑賞研究の授業を核に、校外と連携して新たな価値の発見・創出を図ることの重要性を再確認したい。
- 【音楽】音楽を専門的に学ぶ生徒には音楽家ジストニア等の罹患リスクがあるが、予防に向けた教育は十分とは言い難い。学習指導要領に実技に伴う身体の不調への留意・予防に関する記述を位置付け、ウェルビーイングの向上と将来のキャリア保全の観点から、健康の保持に関する教育が早期になされることを望む。

第1～8回芸術WGにおける主な意見③②

【高校芸術科の学びの改善・充実】（つづき）

- 多くの高等学校では、芸術科としての教科性を基にした教育課程の編成がなされず、単独の科目の状況のみを考慮して開設科目が決定していることから、「Ⅱを付した科目」、「Ⅲを付した科目」の履修状況が極めて低く、工芸は「Ⅰを付した科目」からすでに低い状況。
- 教員配置や音楽教室、美術教室などの施設、設備などが、科目開設の主たる要因となり、教育課程全体の中での芸術科の役割が論議される場面は少ない。
- 科目を選択する生徒にとっても芸術科を学ぶという意識は薄く、単に中学校での音楽や美術の学習経験を基にした科目選択がなされ、学習の動機付けが希薄で、「Ⅱを付した科目」「Ⅲを付した科目」を開設しても履修登録者が少ないという状況もある。
- 諸外国においては、公教育において芸術を学ぶことの重要性が認識され、国内でも中高生の芸術に対する興味関心は高まりつつあることから、**各関係科目の学習内容として「社会において芸術が果たす役割」または「芸術を学ぶ意味」を考えるなどの項目が必要。**

第1～8回芸術WGにおける主な意見③

【学習評価】

- 今回示された、題材や単元ごとに全観点で総括的評価を行うことを前提としない整理は、**評定のための評価ではなく、授業改善に資する形成的評価を重視するというメッセージを明確に伝える点で有効である**と考える。形成的評価を中心に据えることで、**子供一人一人の学びの状況を見取り、資質・能力の確実な育成につながる**と考える。
- 学びに向かう力、人間性等における「見取る姿」については、**従来の評価規準との違いが現場で分かりにくい**ため、評価規準とは異なる「子供の姿を見取るための着眼点」であることを丁寧に説明する必要がある。
- 学習の結果のみならず、理解や思考の変化といった過程を重視する今回の方向性は、自己調整学習など近年の学習理論とも整合しており重要である。学習者が計画・実行・振り返り・調整を繰り返すためには、**単元を超えた一定の期間にわたる形成的評価が不可欠**である。
- 本来、学習評価は教師が測定するためのものではなく、学習者が自らの学びを調整するための情報提供として位置づけるべきであり、**結果ではなく学習過程の質を捉える視点が求められる**。
- 複数の題材をまとめて総括的評価を行い、形成的評価を充実させる方向性は、**指導と評価の一体化に資する**。毎時間ワークシートを記入させる必要がなくなり、**音や音楽に向き合う時間を確保できる点で評価できる**。
- 形成的評価は新たな負担ではなく、**日常的に行われている学習状況の把握とフィードバックを重視するものであるというメッセージを明確に伝えるべき**である。
- 思考力、判断力、表現力等の「音楽を味わって聴くこと」が「音楽のよさなどを味わって聴くこと」に変更されているのは、中・高等学校の目標に合わせたものと考えられるが、「音楽のよさ」を含めることで、音楽の価値を認知する二次的な関与を求める意味合いが強まる。**小学校段階の目標としては大きな変更となるため、慎重な検討が必要ではないか**。
- 複数の題材や単元を通して総括的評価を行うことは、**専門性の高い作業であり、必ずしも負担軽減につながるとは限らない**。題材計画づくりの示し方や教科書の在り方と併せた検討が必要である。
- 学びに向かう力、人間性等の「見取る姿」の文言については、**一文の中に複数の要素が含まれ、評価の対象が分かりにくい表現もある**ため整理が求められる。
- **「見取る姿」が2項目に分けて示されている点は、より分かりやすく提示するための工夫の余地がある**と感じるものの、基本的な方向性としては妥当であると評価している。
- 学習評価については、形成的評価を中心に据えることが、教師が児童生徒一人一人を丁寧に見取ることにつながり、**深い学びの実現に資すると評価される**。一方で、日常的な形成的評価を年度末の総括的評価にどう整理するかや、必要な評価材料の範囲を明確化することが課題とされる。
- 「学びに向かう力、人間性等」の評価について、単元や題材をまたいで「継続的な発揮」を見取るとした場合、**年間を通した各題材の配置において「見取る姿」をどの題材でどのように設定するのが重要**。参考資料などにおいて**具体の例示などを提示することが必要**と考える。
- 制作過程を重視する美術教育の特性を踏まえると、形成的評価の充実には賛成である。一方で、**学びに向かう力、人間性等が軽視される印象を与えることは避けるべき**であり、**教科特性に応じて評価の在り方に違いがあってもよいのではないか**。
- 「見取る姿」について、中学校・高等学校では**「進んで関わり」の後に「学んだことや思いついたことをもとに」などと入れるのが良いのではないか**。

第1～8回芸術WGにおける主な意見③④

【学習評価】（つづき）

- これまで出来上がった作品だけで評価をするということが一部見られることもあったが、作品が残らない造形遊びなども多い図画工作においては、過程を重視する今回の評価の方向性に賛成である。特に低学年では短時間で完結する題材も多いため、題材ごとに各観点の比重を工夫することが重要である。
- 学びに向かう力、人間性等の3要素があることを踏まえると、「見取る姿」も3つに示すのが良いのではないか。
- 形成的評価の充実を不可欠と位置づけたことは重要である。複数の題材で総括的評価を行うことは有効であると考えているが、そのためにはポートフォリオ評価など具体的な手法の提示が必要である。
- 「見取る姿」は抽象度が高く、教師による解釈の差が生じる可能性があるため、具体化について検討が必要。
- 個人内評価は、多様な子供たち一人一人のよさや成長を自然な形で見取り肯定的に評価できるようにすることであり、芸術教科において特に重要である。個人内評価と形成的評価の関係についても検討する必要がある。
- 複数題材をまとめた総括的評価は合理化につながる可能性がある一方で、思考力、判断力、表現力等の総括的評価における「作品等に表す一連の過程の中で児童生徒の姿を捉えることを重視していくこと」について、例えば中学校美術では制作過程の評価が難しい場面もあるため、評価方法の工夫が必要である。
- 学びに向かう力、人間性等に関する今回の整理は、現行の主体的な態度の評価が難しかった点を踏まえた改善として適切であるが、評定との関係については丁寧な説明が必要である。
- 形成的評価を通じて学習プロセスを重視する方向性に賛成である。見取る姿が具体的に示された点は分かりやすいが、小学校と中学校ではより明確な差を設けてもよいのではないか。小学校では自分が中心の内容になっているので、中学校ではより社会的な観点を取り入れることも考えられる。
- 高等学校美術Ⅰと工芸Ⅰで目標を分けて示されているため、評価しやすくなるのではないかと思うが、この2つの表現の違いについては、その意図を説明する必要がある。
- これまで学校現場では「見取る」ことを大切にしてきたので、今回の方向性はそうした学校現場での実践を価値づけるものである。
- 「自分の感じ方や考え方を問い直しながら意味や価値をつくりだす」については、子供が試行錯誤を重ねながら創造する姿を引き出すことの重要性が表れており、そうした授業づくりが求められてくる。
- 教師は見取るだけでなく、それをどのように子供たちを価値づけて引き出して高めていけるのかが重要であるため、教師の力量も伸ばす必要がある。
- 形成的評価の充実には賛成であるが、「見取る姿」と評価規準の違いが分かりにくく、現場に混乱を招く懸念がある。
- 学びに向かう力、人間性等の見取る姿は個人内評価として生徒にフィードバックするもので評定につながらないとする矢印と、思考力、判断力、表現力等の観点別評価につながる矢印とが存在するが、評定に影響しないとされながら評価につながっているように見える点は生徒へ説明できるのか。
- 個人内評価をしつつ、形成的な評価として生徒に還元していくことだけでなく、知識及び技能と思考力、判断力、表現力等の評価と併せ、学びに向かう力、人間性等を総合所見欄等に反映させることは、教師にとって負担が大きい。また、生徒にとっても、あるいは保護者にとっても煩雑であるため整理が必要である。

【学習評価】（つづき）

- 今回の学習指導要領の改訂で改善が図られるとは思いますが、まだ作品中心の評価になりがちになるのではないかと予想される。学習評価はできるだけ簡便で、生徒の学習改善、教員の授業改善に資するべきであり、**今回の形成的評価を一層充実させるという方向性は、表現や鑑賞の学習過程、身体性を大切にする芸術系教科・科目においてはとても良い方向と感じる。**
- 学びに向かう力、人間性等の3要素を思考力、判断力、表現力等の過程で特に表出した場合に「○」を付すことは教員の個人感覚による評価になる恐れがあるため、**「見取る姿」はもう少し具体的な事例を示すなどの工夫が必要である。**

第1～8回芸術WGにおける主な意見③⑥

【ICT活用】

- ICTは共通の学びの土台を作るという授業のユニバーサルデザイン化に資する。指導要領全体の方向性に沿って先生方が何をしたらいいのかということが想像しやすいように、「協働的な学びと探究的な学びの充実」という文言を入れてはどうか。
- 世界中とつながることができる点や、演奏を録音・録画することで自己の表現を客観的に捉え直し、探究を深めることが容易になる。一方で、**思考を広げたり深めたりという全体の方向性と揃えてはどうか考える。**
- 資料に例示されたICTの活用はすでに現場での実践も積み重ねられてきており、**芸術科の学習の本質を損なわない実効性の高い方法である。**
- 学習の痕跡を容易に残すことができるようになったことで、**学習評価に係る教師の負担軽減にもつながる。**
- ICTは教育において多くの可能性を持つ一方で、負の側面も併せ持つ。積極的な活用を促すだけでなく、**適切な使用に関するガイドラインのようなものを示すことが必要ではないか。**例えば思考や技能の習得に本来必要な試行錯誤の過程を省略し、安易にICT機器に依存してしまうことへの懸念がある。
- 身体性を重視する音楽科の特性を踏まえ、**ICTをどのように活用すれば、深い学びにつながるのか、引き続き検討が必要**である。
- **著作権や知的財産権についての指導も重要**であり、ICT活用と一体的に扱う視点が求められる。
- 生成AIの台頭により、これまでの価値観や表現の在り方が大きく変化する可能性がある。こうした時代背景を踏まえると、**人間の感性や創造性を中核とする芸術教科の学びは、今後ますます重要性を増す。変化の激しい社会において柔軟に対応できる力を育成する観点を学習指導要領のどこかに入れておくべきと考える。**
- 図画工作において、発想や構想の段階で表したいことを見つけることは、その後の活動全体に大きな影響を与える。共同編集可能なアプリ等を活用して、造形遊びの活動場所や材料についての考えを共有したり、児童一人一人の発想や構想を可視化したりすることが考えられる。鑑賞においても同様に、**こうした工夫は多様性の包摂につながる。**
- 生成AIは人間の能力を拡張する装置としての側面を持つ一方で、**出力内容の正確性を判断する力が十分でない子供にとっては混乱を招くおそれがあり、身体をもとにした体験活動は大変重要。「身体性を基本とする体験活動とのバランスを取る」といった文言を入れてはどうか。**
- ICT活用に当たっては、身体性を基盤とする人間本来の技能の重要性を改めて確認する必要がある。児童生徒はICT端末に日常的に接していることから、図画工作・美術において、表現や鑑賞の活動を充実させるツールとして活用し教科の目標を達成させることは可能。しかし、**生成AIについて何に使って何に使わないのかという選択など、何らかの方針を示すことや、知的財産権に対する理解は必要になってくる。**
- ICTは、鑑賞の場面において、作品の比較や意見共有、さらには遠方の人との交流を可能にするなど、子供の鑑賞の技能を身に着けることや、子供の心を動かすことに有効な手段である。表現活動においても、**何度も消したり書いたりする試行錯誤ができたり、その過程を記録・保存できる点は利点である。**
- 日常生活でICT機器に触れる機会が多いからこそ、**時間の限られた学校教育では身体性を重視した体験を重視する視点も重要である。**
- 生成AIとの関係は避けて通れないが、どこまで踏み込んで記述すべきかは慎重な検討が必要である。**芸術教科における創造性とは何か、どのように育成するのかを示すことが現実的である。**
- 知的財産の保護については、**教師研修の充実**と併せて進める必要がある。
- 鑑賞におけるICT活用について、有効性もある一方で**細部ばかりを見ることに注視してしまうという課題もある。**活用方法をより具体的に示すことで、現場での理解が深まると考える。

第1～8回芸術WGにおける主な意見③7

【ICT活用】（つづき）

- 知的財産権の保護や情報リテラシーの育成や、感性や創造性の涵養に資するという観点から、情報メディアを用いて表現された現代美術作等について子供自身に考えさせる視点も重要と考える。
- 絵画や彫刻のように手で創作する活動においてICTは創作活動を支える補助的なツールとして利便性がある一方、写真・映像・メディアアートではそもそもICTは創作の前提条件として必要不可欠なツールであるという意味で位置付けは大きく異なる。映像制作やゲーム、参加型メディアアート等は、他教科との横断的な学びにつながる可能性がある。高校の書道教育においては、動画の繰り返し視聴や高精細画像の拡大により、運筆や用筆の違いに気づくことができ、書の特性である「一回性」などの理解に役立つ。
- また、ワークシートをデジタル化して共有することで、テキスト・画像・動画など多様な情報を効率よく記録でき、他者の学びもリアルタイムで参照可能となる。これにより、生徒は互いの学びを参考にしながら理解を深め、教師も適切な指導を行いやすくなる。
- 検索機能の活用により、瞬時に自己や他者の学習成果を抽出し表示することができる。このことは多様な技能を習熟・習得することや、多様な見方や考え方に基づく作品理解、そして豊かに構想を工夫し表現することにつながる。
- 芸術系教科の本質である感性や創造性を引き出すために、効果的なICT活用事例を示していく必要がある。特にデジタルアーカイブは存在しているものの、十分に活用されていない現状がある。
- 書は時間性や運動性を伴うという特性があるを踏まえ、筆の動きを可視化するデジタル技術の活用は有効である。

第1～8回芸術WGにおける主な意見③⑧

【教科書】

- 教科書については、教材構成の意図や育成する資質・能力が分かるようになることが望ましい。
- 音楽の教科書の最後には資料集・楽曲集的な扱いのページがある。それらを先生方が選択して柔軟に自分たちの子供の実態や学校の実態に応じて授業作りができるようにする必要もある。
- 今後の教科書には、個別の資質・能力だけでなく、高次の資質・能力が育成される構造が求められる。高等学校芸術科において、芸術が生活や社会に果たす役割を位置付けることで、芸術科の他の科目と交流する時間を設けたり、舞台芸術や映像メディア等他の芸術分野の学習機会を導入したりするなど学習の広がりが期待できる。
- 教科書の内容精選に当たっては、教師のための資料としての情報が非常に多く含まれるため、そうした資料的価値を持つ内容が削減されることへの懸念がある。教師が教科書の全てを扱う必要はないというメッセージを、分かりやすく伝える工夫が必要である。
- 先生方が教科書に掲載されている題材から選択的に扱う構成になっていることを踏まえると、児童生徒や学校の実態に応じて柔軟に教科書を使うことを促すような工夫を行っていくことが必要である。
- 教科書の内容の精選、形成的評価の充実、そして高次の資質・能力等を生かした題材計画作りという観点を踏まえると、1つの大きなテーマをいくつか設定するという構成ができるのではないかと考える。
- 構造上の工夫をし、高次の資質・能力を踏まえた上で授業を行うということ、また鑑賞の技能をどのように扱うかを教科書で明確に示す必要がある。

第1～8回芸術WGにおける主な意見③9

【その他】

- 現行の**工芸の内容**は、「身近な生活と工芸」及び「社会と工芸」により整理され、どのような視点に立って資質・能力を育成するかという学びの方向性を意識したものとなっており、今後一層進めていくことが必要。
- 各科目の共通する中核的概念は見えてきそうだが、各論に入ったときにそれがどう結び付けられるか
- 構造化・表形式化をイメージするにあたり、現行学習指導要領解説の系統表のように発達段階ごとの系統をはっきりさせていくべき。見方・考え方は系統立てるのは難しく、シンプルに示していくべきではないか。
- 総則評価部会の構造化パターンにおいて示された、高次の資質・能力を「知識及び技能の統括的な理解」とすることについて、「理解」という言葉で文末をまとめることは**芸術系教科の内容の特性を考えたときに適切かどうか**と考える。
- 高等学校芸術科の教科目標が、各科目を繋ぎ合わせたものになっている。キーワードを抽象化してもう少し端的に短くできればよいのではないか。
- 【美術】学びに向かう力、人間性等において「心豊かな生活を」の生活の前に「社会」を記載してはどうか。
- 【図画工作】造形的な視点がどのようなことなのかを、もう一度再確認する必要があるのではないか。
- 【美術】現行の取組の内容は、造形性が主軸にある様に見える。造形性に収まらない現代美術は美術教育に組み入れられていないのではないかと感じている。
- 現代特有のメディアによる感情のコントロールやA Iの進化といったメディア環境において、自分を取り巻く社会環境に対する批判的な思考が育まれるべきではないか。
- 【書道】見方・考え方について「文字や書」と改められているが、別々に取り上げることで、文字と書が別物であるような印象を与えるのではないか。デジタル化により、筆で文字を書く手段以外も考えられる中で、文字や書が何を指しているのか混乱を生むのではないか。
- 文頭にある「捉えたり」について、知的に分析するというイメージもあるので、「感覚的に捉えたり、感じたり」とした方が正確に伝わるのではないか。
- 「自分や他者にとって意味や価値を見いだす」という部分を、目標のどこかに位置付けられないか。目標が難しければ、高次の資質・能力として、知識及び技能の統括的な理解の部分にそれがあたるか。
- 中一ギャップ解消のため、小学校と中学校とのつながりを大切に考えるべき。
- つくって終わり、表現して終わりではなく、展示や発表等でのプレゼン、メッセージを発信するかが高度なフェーズとしてある。表現して伝える、といったことも入れられないか。
- 高次の資質・能力の内容について、美術においては、作品を企画し構想するところから制作や発表にいたるまでの創造的活動の間で、高次の様々な資質・能力が求められる。
- 先が読めない時代だからこそ、問題解決能力だけではなく、問題を見付け提起する力、批判的（クリティカル）な思考力も、高次の資質・能力に入れてはどうか。

第1～8回芸術WGにおける主な意見④

【その他】(つづき)

- 【音楽】「見方・考え方」について、現行より広く、音楽になる前の音や事象をとらえて考えるのはよいと思う。
- 【書道】示し方の基本的なまとまりについて、書道I,II,IIIと展開する中で見えてくる学びを踏まえて、高次の資質能力を検討するものではないか。学習指導要領を表形式にしていくことの利点であり、新たに高次の資質能力を設けることの意義ではないか。書道I,II,IIIの内容を早期に示していただきたい。
- 【書道】学習評価について。学校で評価基準を決める際、「高次の資質・能力」が評価とどのようにかわるのかという疑問が現場から出てくるのではないかと。
- 【書道】高次の資質・能力の示し方について、芸術科書道では分野の区分を設けない案が示されているのは他の芸術系教科とは異なるが、現場の教員にとってわかりやすいと思うのでこれで適切だと思う。
- 高次の資質・能力と発達の段階の関係をどう考えるか。小学校の場合6年間があるが、低学年から高学年まで、そこで達成される姿を一言で表すのは難しい。
- 表形式にするにあたり、罫線で区切られることで、各領域が分断される印象がある。点線で示すということも考えられるか。
- 小学校の図画工作は学級担任が行うことを踏まえると目標の表し方はわかりやすい。
- 目標中の「見方や感じ方」と、「見方・考え方」の「見方」との違いを整理すべきではないか。
- 具体的な文言を議論するフェーズに入ってそれぞれの科目の違いや科目間の統一性が見えてきたが、「高次の資質・能力」、「見方・考え方」、「目標」の関係性をもう少し明確にしないと次の内容の議論に進めないのではないか。
- 【音楽】「深める」という言葉がいろいろな箇所に使用されているが、それが何を表しているのかははっきりしておかないといけない。高次の資質・能力から評価基準を作っていくのか、目標から作っていくのか、何を表しているのかははっきりさせたい。
- 企画特別部会の「資質・能力の深まり」と「資質・能力の一体的育成」の可視化による「深い学び」のページの図には、横向きの矢印が示されているが、斜めにも矢印が向くことがあるのではないか。今後、個別の資質・能力の整理を検討していく中で、この関係も意識して考えたいと思う。
- 【音楽】小学校音楽の高次の資質・能力について、「知覚し感受したこと」という文言は知覚が先に見えるが、感受が先にあることもあるしバランスもあるので、「知覚したり感受したり」や「知覚・感受したり」といった表現はどうか。すっきりさせるということもできないかという視点で「思考を巡らせ」をなくして「よりどころにして」で次につなげたり、「自分や他者にとって」を当たり前のことととらえてなくしたりするのもありかと思う。
- 【図画工作】見方・考え方と高次の資質・能力の関係性について、現状では個別の学習内容から帰納的に導かれることが多いと捉えているが、芸術の本質にかかわる図画工作科の学びの意義という観点ではメッセージがやや弱く、活動レベルにとどまっている。これまでの解説や実施状況調査の結果で示されている言葉をもとに検討していくことが必要では。
- 参考資料で見方・考え方を灯台に例えているように、現場の先生が常に立ち回り、学習目標に向けて学んでいくための大切な目印であると考えている。であるなら、記述がコンパクトで分かりやすく、他教科の先生や学校外の人々にとっても、分かりやすい文言であることが必要。大事なのは生涯にわたって学び続ける視点で、その視点から可能であれば整理していく必要がある。

第1～8回芸術WGにおける主な意見④1

【その他】（つづき）

- 芸術教育において今後より重視すべきなのは、**作り手と受け手のコミュニケーションを意識させるカリキュラム**と思う。作品の完成度だけを評価するのではなく、つくり手と受け手のやり取りそのものを学習課程に組み込むことで、子供は表現が一方通行ではないということを理解し、相手に自分の意図が共有できた喜びも味わうことができる。目標や高次の資質・能力に、**「共有する」、「議論する」などのコミュニケーションのワードを入れたほうがよいのでは。**
- 表現が固まってきて細かいところに目が行きがちだが、**学校教育の中でじっくりみることができる態度を育てることが大事**だということを、これから言葉を精査していく中で意識できたらよいと考えている。動画を早送りで見ると、情報を合理的に得ようとする現代の傾向の中で芸術教科に何ができるかを再認識した。
- 【書道】書道Ⅰ～Ⅲの目標の改善案が示されており、Ⅰは「書道の幅広い創造活動」、Ⅱ、Ⅲは「書道の創造的な諸活動」と記載されているが、Ⅰの創造活動のほうが高度な芸術活動にとらえられるので、「創造的な活動」としたほうがしっくりくる。
- 文言の精査も大事だが、**そもそも芸術教育は今の子供たちにとってどんな役割をもつか**忘れないようにと思った。
- 映像やメディアについてどこかで触れておく必要があるのではないか。**既存の芸術分野のリソースでこれらを検討するのは制限がある。調整授業時数も活用できるのではないか。**